川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十四年四月二十五日印刷
昭和五十四年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻　六二四号

日川協加盟

No. 624

五月号

児島与呂志著（市電第一号の写真ほか267頁）

川柳句集「地下鉄」

刊行記念句会

日時　54年6月7日（水）午後6時

会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
（地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ）
（電話271・3935番）

柳話　黒川紫香

兼題「足」（測量）　児島与呂志選
「改札機」　野村太茂津選
「乗りかえ」　西田柳宏子選
「河内弁」　橘高薫風選

席題　当日（二題）と選者発表

会費　千円（句集・記念品として短冊掛け呈）

発行所・大阪市南区鰻谷中之町二〇
川柳塔社

序文　中島生々庵
編集　不二田一三夫

頒価千円
（送料共）

近日発刊

橘高薫風編
「麻生路郎」
定価　千円・送料百六十円
発行所　東京都世田谷区三軒茶屋二―一九
構造出版KK

島居百酒著
「白い歯」
定価　千五百円
発行所　構造社

★

若本多久志著
「続・老いの坂」
路郎忌に発刊予定

見せかけはやめて勝ち目のないと知り

道理へこまず世間さまもたじろかず

向い風いたわり合うて老夫婦

彼岸すんで五人囃子の春が燃え

天気晴朗飾らない言葉でガムを噛み

中島生々庵

四月馬鹿

月刊「潮」の四月号に、長田弘が座談会で次の如く述べている。曰く「死ぬる馬鹿生きている馬鹿四月馬鹿」。このみごとな一句にぜんぶ尽きてますね。うそをついて人をかつぐことが許されるというわけだけれども、逆に言うと、うそつかれてかつがれる平生の自分に気づく日、つまり身の程を知らされる日でもあるわけですね、と。わかるような気もする。ところで、先月毎日新聞のコラム「真面目な冗談」に面白い記事が目についた。「今年は差別用語の廃止が今までよりも一段と徹底するであろう。すでに「気ちがい」を廃しているが今年は一歩進めて「馬鹿」をやめ、知能発展途上者」。いや全く、知能発展途上者の経験をしたよ。など言う会話が出来上る。私などはこうした字余りよりもズバリ、馬鹿ばかりやってると言って貰いたい気もするが如何。とにかく考えてみると四月だからこんなことが言えるのかも知れない。

川柳塔五月号

座右の句

北壁の男らしさを見て飽かず　（弘　朗）

私の句

大砂丘砂生きている飛んでいる　渡辺菩句

川柳塔　五月号　目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

四月馬鹿……中島生々庵…（1）
川柳の名称変更問題……尼　緑之助…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（二四丁）……（26）
入江　勇・清　博美・八木敬一・西原　亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木　黄・室山三柳・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（30）
慶紀逸の人と俳歴（川柳太平記⑫）……東野大八…（24）
秀句鑑賞…（同人吟）……若柳潮花…（38）
（水煙抄）……小野克枝…（39）
愛染帖……橘高薫風選…（43）
川柳のいのち……戸田古方…（28）

川柳の名称変更問題

尼　緑之助

川柳新聞一月～三月号に掲載された『川柳という名称への疑念』山村裕氏――を読んで共感を深くした。「川柳」の名称変更を提起されているが、その要旨は

一、柄井川柳は川柳の始祖とは言いがたい。

二、川柳という名称は、初代川柳個人の業績という連想を呼び易くし、短歌や俳句のように、流派全体の傾向や、その特色を暗示させる名称ではない。

三、故に現代以降に於ても大きなマイナス要素を抱き続けてゆくのではないか。

氏の説のように「川柳」とはどんなものか（川柳人外の人）と問いに対し、『俳句と同じ五、七、五で云々』俳句は俳句だ、川柳は川柳だ、と一言では不足を感じる。どうしても附言をたどたどしく並べないと理解してもらえぬもどかしさにつき当る。どうしようも

旅の郵便貯金……西尾　栞…(40)
一分間の柳論……野田素身郎…(29)
雅号ぶっちゃけばなし……林　葵丘…(42)
本社兼・席題課題表……樫谷寿馬…(56)
初歩教室……本田恵二朗…(48)
大萬川柳「ゆとり」……川村好郎選…(50)
柳界展望……(52)
本社四月句会……(庸佑・整理)…(59)
各地柳壇(佳句地10選)……不二田一三夫選…(58)
「新　緑」……大峠可動選…(46)
一路集「男の子」……保西岳詩選…(46)
「飾　る」……島居百酒選…(47)
編集後記……(一三夫・葉子)…(65)

座右の句

足跡を残そう砂のある限り　（恵二朗）

私の句

秀才の正義の旗に集まらず　吉野富子

ないコンプレックスが離れない。

山村説による「川柳」という名称が適当でない、からだということになる。

氏も述べている。かつて「草詩」とか「行詩」があったが、いつの間にか消失した。

確か昭和初期前後と思うが、（前記の名称も）鳥取県の新聞柳壇に「生活行進句」の名で自由律川柳があったが、長くは続かなかった。川柳の壁は厚かったということになる。

また、氏は提案者の試案として「柳句」を示されている。柳句の「柳」は川柳をもじったものではなく、柳の枝のしなやかで弾力性のある「柳」の句だとの説明がある。更に氏は続ける。「柳句」以上のいい名称が決ったとしても、成功は容易でない。当分川柳と併記で進み、どちらが残るか、消えるかを待たねばなるまい云々。

全くその通り、名称変更は大変な仕事である。柳俳、同音律短詩型の多党化に混迷を深くし、細分裂から新流派誕生にも及びかねない。

『柳句』案には一寸拍手を控えたいが、さらばといって良案が浮かんで来ない。日川協あたりで検討していただきたいものと思う。

若本多久志選

菜の花の道托鉢の列が行く
つくられた女ネオンの灯に踊る
草に寝て眼はふるさとの雲を追う
俤は別れたままの若さでい
喪服着た女手桶の桃の花
激流の渦が巻き込む山椿

高槻市　若柳潮花

偶然の一瞬　融け合う友となる
燃える老　みつめて巫女の鈴かなし
水入らずの器に盛った嘘もある
み仏の微笑み消えず雨しとど
もの忘れ小さな火種消えぬまま
星霜の重みへ松のひとりごと

富田林市　和田維久子

自信なき便りポストを振りかえる
フィルムを廻すと過去がしゃべりだす

東広島市　高橋鬼焼

古里の土なら踏める地下足袋で
一坪の庭から春の詩をひらう
空と海島を眠たい春にする
鈍行の旅なら春が描けそうで

鳥取市　両川洋々

失業の指とも知らず爪が伸び
強そうな名前オシメの児がもらい
色褪せた仁王乱れた世を叱る
外遊十日ああみそ汁の夢で起き
子の胸襟解かす言葉を妻と撰り

倉敷市　稲田豊作

読書百遍愚鈍も少し目を開き
悲話詰めて老女の胸は濡れている
ふところの広さ深さよ父がいて
物の値よ汗の代償だけ安く
嫌悪期が来たとは娘大げさな

島根県　飯塚虎秋

すぐそこに春が揺れてる水溜り
したたかに酔うて孤独を砕く夜
皿小鉢イチゴの春も添えて盛り
試験前父も信心深くなり
正論をぶって冷めたい目を集め

神戸市　仲　どんたく

蘭楚楚と支那麗人の貌で咲き
盆梅の痛かろ限界まで刈られ
役者が俳優となり味が抜け
銭にならんことばかりして生きている
こうしても食えるとルンペン見せてくれ

和歌山市　野村太茂津

小賢しい手助け小雪舞う風情
堂々と老醜見せず繕わず
民謡の小節に匂う里の土
アンカーの赤錆それからの政治論
労わりを明治が撥ねる頼り甲斐

藤井寺市　児島与呂志

喜びを隠さず女の目が笑う
ささやかな祝いに嬉しい墨を摺る
たくましい女は春を闇歩する
気がかりな話は老いの耳がきく
病む人の気ままな心はそっと抱く

島根県　小砂白汀

長男のおさがりを着て野良仕事
降り出した雨から春が匂いだす
田に降りて白鷺ポツンと考える
透きとおる声だと思う叱られて
カー族を股間潜ぐらす歩道橋

鳥取県　鈴木村諷子

その前に先ず人間になりなさい
一隅にまだ日本は亡びない
一瞬に消えるこころの虹を抱く
風薫る鯉のお腹を吹きぬけて
春の水おもてを通る女(ひと)の群

大阪市　中川滋雀

息切れの坂に兎をふり向かず
幕みがく指のすきまに亡母がいる
石畳詣る心の音になる
トースター朝の夫婦を軽くやく
寝語りのしじまに命かみしめる

大阪市　本多柳志

この人から何かを得たい瞳を見つめ
二の矢などありと思わぬ電話口
企みのない掌とわかる温かさ
まだ炎える火種をせせる薄化粧
鈍行で来て美しい空と水

竹原市　時広一路

濁った日川は流れを早くする
廻り道すればのどかな風が吹き

年輪の一つ一つが生きていた
白い歯の見える笑いに他意はない
どの花も精一杯の色で咲き

倉敷市　田垣方大

恋猫と選挙の連呼すさまじい
慇懃な言葉で兄弟不仲です
元を書く職業欄に見栄があり
蹲いて用事を思い出すも春
妥協することを拒んだ白い花

新宮市　大矢十郎

最愛の顔は鏡の中にあり
切り札があるなと思う妻の問い
守銭奴へ貢げば白い歯を見せる
顔色を見て補聴器の掛け外し
喧嘩かと見る魚市の朝の声

米子市　八木千代

桃の灯よ内裏の朱唇ふっと開き
タクシーで来たとは観音気付いてず
訪うたびにみ腰の細き弥勒仏
騒がれた名に進退を見失ない
酢めている眼鏡も女隠し持つ

大阪市　川口弘生

少年の夢は空地を馳け回る
重すぎる期待に背骨曲って来
迷路では蟻の智恵でも借りに行く
権力の仮面が無礼な口を利く
横書きにされて平仮名尾が振れず

青森市　工藤甲吉

雑草を愛し俗世を遠ざかり
先祖田吾作土を嘗め土を這い
パックではすでにどうにもならぬ皺
伊邪那岐と伊邪那美の部屋灯が消える
万物に回向　夕陽へ手を合わせ

岡山県　嘉数千代香

儲かったときの素顔は秘めておく
節くれた十指に嘘のないくらし
真相はここも歯車合わぬ愚痴
割り切れぬことのみ多し庶民の譜
すみません素直にいえたお茶の味

倉敷市　小幡里風

借金が出来て人間臭うなり
別れ道まだ振っている手が泣いて
これきりのひとだと知っている握手
母と娘の握手に企み事はない
企みの好意と気付く日の不信

米子市　林瑞枝

愛しさが担保返らぬ銭を貸し
ハンドルを握れば思索の部屋となる
ドック入り人の生きざま垣間見る
青春レポート今日も元気だ荷が軽い

砂巻いて吹く薫風を飛ぶ翼　岸和田市　高橋操子

お日様に勿体なくも朝ねする
人間の気ままゆるして春が立ち
嫁の短所包んだ母の広い胸
親のない娘は親のこと口にせず
（孫雅子歯大合格）
試験から試験一途な孫の旅　和歌山市　松原寿子

想い出が日記の隅に落ちている
面影を心の襞に秘めて生く
花言葉視覚の中で冴え還る
逢えた日の涙ぽろぽろ毬となる
結び目の固さに澄んでいるえにし　倉吉市　奥谷弘朗

おふくろの味に一家がささえられ
鶴の一声もめる会議のケリを付け
裏の裏読んでてやっぱり引かかり
老の坂そろそろ欲を捨てはじめ
装うと妻に色香がまだ残り　鳥取県　林露杖

矢ッ張りね片目ダルマの独り言
五月雨に落選のビラそぼぬれる
村雨にぬれて乾いて一人旅
袖ひくな意馬心猿の花茨
姑の目なのだ母の目ではない　西宮市　藤村〆女

倖をつめてみの虫風にゆれ
励ましの握手にぬくい血が通い
四面楚歌喋れば喋る程淋し
人生がここから狂うた宝くじ
桜貝耳にあてると波の音　泉大津市　村上春巳

大阪の商魂立派に損もする
佗びしさは駅の貸傘帰らない
お水取り鹿の足どり軽くなる
餌をまいてやった雀に裏ぎられ
ごめんごめんミミズが寝てたとは知らず　島根県　藤井明朗

桜前線値上げを雲に乗せて来る
親、子、孫、馬鹿正直だけが似る
曇のち晴れ余生を丸う生き
休耕田いつまで続く過剰米
静中動あり選挙終盤戦　美称市　安平次弘道

また来ると人を信じて帰る鶴
無人駅素朴な人が住んでいる
以心伝心寡黙になって夫婦老い
体験談おもしろおかしく嘘もまぜ
全方位などと自論を持ってない

竹原市　山内静水

指輪もてあそぶおんなのもの想い
仏壇へそっと供えておく気持ち
幸うすき妻がテレビへ笑いこけ
方言の謝辞に拍手の鳴りやまぬ
言葉などいらぬ両手でした拍手

岡山県　出原敬一

札束よ正義は君に譲れない
語り継ぐ囲炉の父子ダム反対
廃鶏の氷雨に濡れている別れ
子を諭す寡婦の涙は舞台めき
詩集読む妻の笑いが静かすぎ

神戸市　中村ゆきを

業背負う小さな影も知恵おくれ
お小姓の顔して自閉症児病む
少年の目に悲しみの塔は耐え
冬の雨別れて日暮れ米を研ぐ
京料理のれんを出れば細雪

和歌山市　若宮武雄

枕こそ僕の素顔の置きどころ
明日と云う字を明るい日と読もう
さよならは言えぬ辛さに手も振れず
人間として子育てに迷う日々
真正直暮しにすまぬことばかり

竹原市　三宅不朽

いうなれば秋に牡丹のような寡婦
春愁のよしなき過去に手相を触れ
おや刺身ですかと猫がまばたいた
どの眼にも川が流れる石仏
種を選るほのぼのといる嫁姑

今治市　月原宵明

桜前線あとを賃上げ追うてゆく
きれいごと言っても金がつきまとい
朝酒の味を覚えた定年後
触覚は春と素足が砂に言う
飼犬の自由鎖の二メートル

大阪市　金井文秋

快食快便春はうららか心満つ
えらそうな事は云えない物忘れ
逢う人が変り仮面も取り替える
疑えばレールの上も走れない
お得意へ言い勝ち後味悪くなる

大阪市　小出智子

ああ西出一栄さん
三光の桜待つひと一人減り
木々芽生くまだまだ負けてなどおれぬ
ひたむきな日は珈琲を飲みすぎる
たとえばの話の中にある諭し
中年を過ぎて夫婦と言うものか

大阪市　柳原静香

聴こえない耳へ吹き込むいい話
弱りゆく心へホロホロ沈丁花
セットしてようやく春の貌になり
ゆずられた席へ済まない肥満体
独り居に馴れて小猫との対話

大阪市　河野君子

今はなき西出一栄さんへ一句

ねっくれす繰れば浄土の風がある
傘干して昨日の出会いを折り畳む
桃の花女の性を問うてみる
言い訳を抱けば鏡のしらじらし
妻の座よピンポンパンと黄昏れる

大阪市　那須鎮彦

儲けるのが不得手黙々とたこ焼屋
石仏は思索するのが好き　無口
巻き添えを喰った痛みを忘れまい
母の声する方へ行く分れ道
せいいっぱい働き靴の紐ゆるむ

藤井寺市　西いわを

腰据えていっそ病と仲よしに
ブロイラー男の味覚から外れ
風呂敷の融通無碍はポケットに
体重計一週間は早やすぎる
甘えてる父が私にあってよし

八尾市　香川酔々

父眠る村で見つけた小鳥の巣
仁王にも四季の詩あり桜咲く
結婚は間違いでしたインタビュー
雑踏の中に責任置いてくる
ローカル線窓から見える卒業式

竹原市　森井菁居

姫あやめひそと咲くのが性に合い
夢あたためて罵声が苦にならず
明日があるつもりで明日のスケジュール
スランプが続くと靴が重くなる
主義を捨てたらボロボロになりそうで

松江市　恒松叮紅

氷雨打つ窓で居職を羨まれ
町内で一軒だけの日章旗
三回の食後を忘れるほど癒り
なりゆきに任せ無職の日が暮れる
チャンとした理由があって昼の酒

八尾市　高杉鬼遊

百歳になれば女も歳が云え
陽の当たる椅子には他人がいつもいる
寂しさを見せたりしないりんごの芯
友達のできない犬でよくなつき
お琴教えます家からの沈丁花

八尾市　高橋夕花

騙されたことも美徳にしておこう

干されてから大根生きかた考える
時ばかり流れてしまう母の壺
心急ぐ花のいのちが消えぬまに
友達と言う名に恥じぬ道がある

竹原市　小島蘭幸

命名の本など買うて来て迷い
かたつむりいつか手本にされている
バイトの娘花一輪となる職場
人生街道みんなヒーローにはなれぬ
皆勤賞ちっとも進歩せぬ男

和歌山市　西山幸

春風駘蕩ひとの左遷よ栄転よ
四季のないビルで造花が媚を売る
むかし嬉しい言葉を聞いたれんげ道
歳月が今日のスープの味に溶け
負けておくおんなの戯曲ばかり書き

島根県　堀江芳子

縁という不思議な糸のあたたかさ
初誕生初雛結納春が舞う
ドラマだと思えば耐えることやすき
掌を合わすきりない闇の深さかな
冗談で捨てる苦しみだってある

富田林市　板尾岳人

汽車に乗る男は山へ行く噂
河童の子金剛山へ来て遊べ
摩崖仏水を欲しがる蜂一つ
山男天真瀾漫水を飲む
母と来る金剛山に水がある

大阪市　大坂形水

内田君を偲ぶ五句

今にして「多聞随聞」に潜むもの
大阪手帖どの頁にも君の息
手薄さが一層哀し終刊号
無名作家の発掘もして大阪手帖
二百五十号が追悼号となりジ・エンド

大阪市　不二田一三夫

昼に起き昼に朝めし食う暮らし
常用漢字に「殴」を増やすお国柄
天牛は蟹が這うように歩かせる
箱登羅を知ってる人から来た手紙
マナーで食うなンと不味いものばかり

大阪市　欄蘭

ストーブも老夫婦らしく小さく燃え
雲の端ほどいて見たいと思う夢
光蔭の早さへ年輪一つ増え
土一升金一斗ほどの地価となり
向きを変え枕を変えて眠れぬ夜

島根県　西村早苗

縁談へ親は心に荷をまとめ
実らない愛は鏡に死を覗く

闇よ包むな悲しいおんなが消えてゆく

今治市　長野文庫

後門の狼下積みの補欠
頑張りのまま釜ゆでの浅利貝
失職の何か騒ぎを待っている
誘われたように蕾がそろり出る

東大阪市　市場没食子

省りみる一生素肌で来た感じ
朝寝坊早昼にする箸をとり
境内をうす陽の下で老夫婦
時事放談すんで日曜またもぐり

貝塚市　行天千代

子の無い夫婦に愛のもろさよ
細く太く写つす鏡の裏表
誘われて仕立ておろしへ手を通す
方円の水の教えを守りたし

倉敷市　藤井春日

残されし母の日記に励まされ
明暗の鍵を握って呱々の声
寒椿雪の衣を着て燃える
南無仏お花も高うて買えまへん

鳥取市　河村日満

豊生君退院

全快の胸にとどめた辞世の句
健康を誇りつづける朝の水

平凡がよいと言いきるほどに老け
梯子酒わたしに似てる子をほやく

西宮市　島居百酒

白旗の一本はいつも抱いて出る
故里の壁落書き残した友は逝き
やりこめる言葉余って寝つかれず
狼は追われず羊を庇うだけ

呉市　槇田英詩

良妻へ咳を殺して早寝する
斜めうしろで妻の姿態をつくづくと
考える芦の煙草が消えている
大志十年虹は縋せても七彩で

倉敷市　野田素身郎

快復のきざし桜は三分咲き
先行きはどうあれ妥協は今できぬ
爽やかな日宝くじ買ってみる
共稼ぎ時計合せて朝を出る

大阪市　有信新之助

失礼しましたと戦前派に踏まれ
書かされる筆でもないのにのし袋
ただ酒も奢りの酒も経た手酌
尼さんの齢が読めずに電車くる

富田林市　岩田美代

七彩の手袋過去を握ってる
流し雛水がやさしく押している

女不意に年を隠せぬ事を言う
寒椿ほころび私も紅を買う

川西市　戸田古方

あたりまえ思たらあきらめられました
みなありがたし生かされて生かされて
好きやいうてるうちに好きになり
ある午後のプリンが喰べとうなってくる

竹原市　鈴木かつ子

感情のもつれ悲しい灯にすわり
明けの鐘つく人思う雪の朝
手のとどく花は他人が先きにおり
光らない海から消えていくロマン

姫路市　植村客遊子

よくできる子で鉛筆を大事がる
その人の歩巾を意識して歩く
水ゴクリ男の意地をかきたてる
だれよりも立派飯屋の娘のヒップ

出雲市　原独仙

加害者の口　犯されていた娘
大人にもおやつ出雲はお茶が好き
また夢が時効の秘密追っかける
直立の不動忘れてた背の曲り

米子市　小西雄々

命までかけて結ばれすぐ別れ
慰謝料で育てる子供は食べざかり
養生訓どおり生活して肩がこり
新築へ祖母が口だす裏鬼門

尼崎市　黒川紫香

学歴がなんだ自分の羽で飛ぶ
手のひらで解けこむ雪がいじらしく
墓に寝てからの亡妻年寄らず
故郷の子の話で飯場火が燃える

大阪市　山川阿茶

花吹雪浴びて狛犬静座する
客種の中座は中座角は角
くたぶれた千秋楽のさくら散る
ママ　ショート　娘は腰まで髪のばし

大阪市　室谷徹舟

一枚の葉書が果す軽い義理
悔いのない一日終る茜色
梅林のござへ三代の顔揃う
倖せは私の心の中に住み

松山市　谷真風

割箸を割るのが好きな孫もいる
セールスの影もやっぱり鞄提げ
ハイヒール穿いても少し背が欲しい
れんげ草夢はいつでもあたたかい

諫早市　原田明春

梯子酒足が知っている道順
言い負けて蹴る石もなしアスファルト

汽車のように乗替えきかぬ夫婦愛
ハネムーン落ち着いた顔で娘は帰り

島根県　錦織文子

母になる倖せ弁当にもつめてあり
ピンポン玉外交とは知らず飛び
おんなじ童話孫あきもせず枕持って来る
四角な石丸い心が見えませぬ

堺市　高橋千万子

包まれて包む心を忘れかけ
空っぽの頭おしゃれは群をぬき
死を誘うナイフが錆びていた安堵
大吉と安堵の運を神がくれ

伊丹市　樫谷寿馬

押えても泣くまいもう人形でない
早退へ妻の感謝が咳になり
一本に纏ってゆく老の川
話題から離れて庭の松が居る

東大阪市　斎藤三十四

スターの笑顔テレビに向けている
サービスします一杯ついでくれただけ
研修の座禅痺れの足は泣く
古希近く人生観は南無阿弥陀

米子市　石垣花子

燃えもせぬ齢で女嫉妬する
コンパクト尼僧も女の顔で見る
余燼燃え養老院の恋実り
還俗をさせたいような尼の肌

大田市　藤田軒太楼

こぼれ種芽生えて天地の愛を知り
一線をひいて愛情受け留める
枯れてない証し老梅花をつけ
横車おしてもみたい日のあせり

大阪市　津守柳伸

生きている証拠禍中に住む女
ミンク着た女が無心云う受話器
信念を変えぬ根性悟らせず
幸せを謳歌している夢しばし

大和郡山市　森田カズエ

ご飯です孫定位置へさっと来る
ドアホーン短気な指と知っている
缶詰の図柄にまんまと乗せられる
娘ら去んで明日にまわす洗いもの

岸和田市　植山武助

日本の自然へうれしく住み馴れて
お目出度い長寿を他人がさわぐだけ
居眠りをソッとしておく春日和
傷心の旅行は海の見えるとこ

名古屋市　大林曲ん手

嘘一つ悔いて聖書の拾い読み
花椿自我に徹してもろに散る

行き過ぎぬようにと妻の貝柱
内閣はどう変ろうと蟻は蟻

岸和田市　清野こう

好奇心だけで見つめている他人
先着順割込み許さぬ列をつめ
沈丁花花惜しみなく芳香を放ち
もう白髪出たねとさびしい娘の瞳

和歌山市　内芝としよ

見えすいた嘘へ素直な脂汗
踏まれても雑草恨みなど持たぬ
金だけが頼りで心荒れてゆく
狭い門くぐった後も風きびし

島根県　栂みどり

初節句白酒とろりとろり酔い
美しい紅から女の序曲きく
よちよちと首で舵とる歩巾かな
悲しみをあずけたはずの三回忌

京都市　都倉求芽

揃えても揃えてもスリッパ女中に逆さ向く
従いて来ぬ影は乾いた砂で埋め
一つぶひとつぶの苺に春がつまってる
耳底のテープは何時でもかけられる

寝屋川市　江口度

たてのもの横にした日に家を出る
副食をみな凍らして妻の旅
青い鳥迷路の向こうにいるのかも
蛇の真横で冬眠をしていた蛙

和歌山市　津田与史

夕焼はこの世を憂う色で焼け
老人の春は一と月後で来る
老人のおしゃれは赤いネクタイで
本日煙草五本体調悪し

鳥取市　有田とし江

梵鐘の余韻へ亡夫を見る想い
身勝手を許し合ってる日曜日
条件が別についてるいい話
老斑の手の爪を切る寂しさよ

三重県　坪田冬花

この娘にも角が隠れた目出度い日
百千の瞳に挑む初舞台
愚痴いつも笑って聞いてくれた妻
童心に帰って見たい日曜日

橿原市　岩井本蔭棒

初老まだ銃を向けたい国がある
私を睨んで盆栽枯れている
茶畑で大宮人が掘り出され
算術とけなした医者に助けられ

笠岡市　松本忠三

選り分けた篩に仕掛けがあったらし
筒抜けに聞える声に嘘がない

言わなけりゃ分らぬものを貸衣裳
肩越しに王手をかけたい顔があり
姫路市　大原葉香

人生のスタート真赤な子が産まれ
島かすむ向うに春が満を持し
資本家はビルを砦にして栄え
童謡の鳩も過密化するお寺
奈良市　宮口笛生

たたかんといてやろ　冬の蠅
針金に従いそうろう鉢の松
上司不信肚に左遷の荷をまとめ
さか波になって離れていくみじめ
唐津市　新岡回天子

票田にまいた種だと惜しくない
老人大学世の雑念を忘れよう
よろこびも無く生きて来て喜寿むかえ
菊天位高価な土は汽車で来た
宇部市　平田実男

司会者がとちりそれから和む会
握手して票になる手とならない手
寄附帳へしぶしぶ右へ習えをし
娘の恋を妻若やいだ声で言う
鳥取市　岸本無人

方円の器に善人詰め込まれ
コップ酒暮しの詩に事欠かず
後晴れの予報へ釣竿出しておき
顔洗う水にも春が来た安堵
大阪市　天正千梢

グラフだけで語る評価のわびしすぎ
本気になって己を叱ってず
それなりの理由があってつむじ風
栄養は法句経から吸収し
松原市　玉置重人

地下街と言う傘があり大都会
ベレー帽小粋に老人乗車証
米どころ米食べようというテレビ
さようなら撫でるデスクも無い職場
寝屋川市　宮尾あいき

一栄様御他界
句友の訃沈丁花の香にむせび泣く
女人こけし今年も一人桃の花
忘れたい人思い出させる沈丁花
嘘々々花まで造花の美人バー
大阪市　江城修史

幾歳か妻をば楯に生きて来し
子が走るレール夫婦で敷き続け
花に酔う心に遠き居職の灯
民族の夜明けへ虹よ消えるなよ
大阪市　神夏磯道子

これからの余生へ花の種を蒔く

愛犬の死へ放心の二、三日
真白いガイドの手袋信じきり
本心を見抜かれているあぶら汗

鳥取県　金川満春

人ごとでないポックリ寺の記事
妻六十路まだまだ女アデランス
場の持てる男一と言多過る
さりげない電話本心探られる

大阪市　本間満津子

譲られてまだ若い気の腰おろす
ご好意が断り切れぬ荷の重さ
銀髪になったら着たい色があり
まっすぐに伸びよと若木の枝おろす

兵庫県　河原みのる

知床の旅情は暗し雲の垂れ
稲作るほかに術なき春が来た
ハク製にされても猪突っぱしり
クシャクシャに丸めてみたいよなひ孫

枚方市　宮川珠笑

諍そうた妻の寝顔のあどけなし
夜は受験児朝は夫に仕え　妻
心中の相談してるベンチかも
つきあげる部下　我が子と同じ年

岡山県　竹内翁童

良心に従う証人など居らず
人生の岐路で温情忘られず
囲りみな敵意に満ちる失意の日
又となないチャンス善意にはばまれる

松原市　谷垣史好

風もやわらか円空仏がそこにある
田吾作も与太郎さえも嫁がいる
風船のしぼんだ恋を捨て切れず
兄弟の無口がつづく花曇り

宝塚市　傍島静馬

自適する身にも日曜気がほぐれ
娘を訪ねくつろぐ母の割烹着
馬鹿になった日から病状好転す
むくつけき男の手になる相聞歌

泉佐野市　阿萬萬的

日展を見て
春を手まねきサイロの屋根に陽が当る
餌付された猿の眼冬を知らない眼
薄陽の濃淡高原すでに春の色
海鳴りの雪国の空黒で描き

鳥取県　川崎秋女

宝石展ながめるだけで足りる妻
五十肩庇う右手はまだ四十
癌に勝つくすりがほしい子の叫び
筆太に孫の名を書く命名日

東大阪市　文川野生

野良犬も今日一日を生きている
人形の後は見ない事にする
もう起きぬダルマは見捨てられている
残業がなくなる男は走らない

兵庫県　辻　文平

脱いでも脱いでも裸にはなりきれぬ
音階が正しくて冗談にはならぬ
十二月の風がときめき消しにくる
追われてるときの男が満ち足りる

島根県　大森孝華

ひとり旅峠へ続くまた峠
それからを語る親子の水いらず
感激の幕切れ余韻まだ残こり
真実の鏡が見えぬ曲り角

寝屋川市　柴田恵美子

春宵を豊かな十七字で飾る
古参には古参の意地がテレックス
お遍路は乾いた心へ鈴ならす
働いていない男が脂切り

岡山市　川端柳子

意のままに育つ空想故たのし
街角で出会えばすばらしいミセス
見舞客花の話題が障りなし
信号は青青青で無事にパス

平田市　久家代仕男

ひったくり　放火　人質　修羅の春
英新聞膝に職安の順を待ち
ひそひそと噂話を背中の目
値下がりの大豆　豆腐は知らぬ顔

鳥取市　小林由多香

身勝手をとがめる心は隅に置く
弁当を開けば今朝のヒス匂う
孫の手のぬくみが倖せ弾ませる
夜勤のくせついた太陽目に痛い

竹原市　古谷節夫

マイカーを持たぬプライドだってあり
桜咲く離別の詩も待っている
例えばの話しに夢も盛ってあり
暖冬へお灸のように春の雪

玉野市　小谷仙山

燃えつきて残るは一握りの灰
光る靴履いて桜に草臥れる
雨煙る牡丹に首は重もすぎる
土筆んぼ春一番が待ちきれず

呉市　林野甦光

旅二人靴を揃えたアラカルト
話題すぐ変えて女は背を丸め
定年を片目ダルマで通り越し
聴診器春の病いが見出せず

海南市　牛尾緑楼

決意して土の匂いに嫁がせる
「ご苦労さん」一言ですむ退社の日
ソロバンは知らぬが釣り銭まちがわず
下りられぬ舞台男は背で泣く

京都市　山本規不風

父祖譲らず生児に二つの名を付ける
居留守後の様子受話器へ走り出る
春風が若い言葉を覚えさせ
共稼ぎ女は謀反持っている

岸和田市　島崎冨志子

春風が胸のトビラをノックする
年ですとむほんを起す足と腰
自惚れてそっと鏡と対話する
合掌のゆるみへ風が入り込む

京都市　松川杜的

時雨亦よし京の冬歩く
喪の家で一際匂う沈丁花
松の内それから葉ぼたんほっとかれ
六十路まだ口笛ふきたき日もあって

松江市　中川晃男

雪のない冬　山陰に落ち着けず
深々と御辞儀　選挙だナと思い
腹据えた今更何の慰めか
胸にためた涙が頬をふるわせる

大阪市　黒田真砂

重い日も軽い日もある老の下駄
子のブーツ借りて若やぐ春の街
恋すてた女が拾う石一つ
自殺等すまいいぴきにほっとする

大阪市　横地雅風

埋ずもれる句でよし余生へ灯をともし
握る石投げずに耐えて廻り椅子
足投げて初心忘れている警士
先生を作る一票聴きに行き

東大阪市　崎山美子

朝刊に美談みつけた茶がうまい
土壇場に苦手などとは言うとれず
共稼ぎの舌は冷凍食になれ
凍てついた道をパートへ黙々と

兵庫県　遠山可住

親戚の仕打ちへ他人が同情し
証文を呉れと他人の顔になり
女には負けず女を悲しませ
かたくなに歩いた道に悔がなし

守口市　野呂右近

子育ての本は老妻もう読まず
泣くだけが意志表示なり孫を抱く
千円の義理を惜んで残す悔
米麦の花は観賞用でなし

米子市　佐伯越子

ふる里の湖底に別れの道が見え
安万呂の墓が古代史しゃべり出し
裏作も植えて出稼ぎ里を出る
雪国の詩情に遠い生活たて

鳥取県　福田保子

心音を確かめ働く靴をはく
シクラメンすくすく愛の彩を抱く
新顔へお茶くみ昇格してる春
こぶし咲く雑木林を見て飽かず

京都府　間嶋青丹子

お水取

関西の春へ炎のページェント
新入りにオールドミスの冷たい目
年とらぬひけつを聞かれ黙っとく
アルバムのえくぼ思い出語りかけ

鳥取県　佐々木静泉

プライドも細り少し老いすこし老い
一日が短い焦りのまま暮れる

父闘病

食欲ももどり病父の試歩確か
年度末一年悔いる焦り湧く

大阪市　西川誓二

人生の長丁場息切れを戒める
何と云う無様おのれを前に出す
矢継ぎ早に客、妻を慌てさせ
今日は三隣亡方々で頭打つ

兵庫県　北山越山

又聞きばっかり井戸端の笑い声
花鋏素直に動くよい話
あたたかい湯げ古里の母といる
お手軽なお値段ですとは勝手なり

島根県　榊原秀子

簡単な手紙で倖せだと思い
啓蟄ときく日の鉢のかわいい芽
針持ちつきくオープン戦から春がくる
お悔みも涙　涙の事故死なり

八尾市　納糸葉

終着駅もたぬ女に旅つづく
人前で哭かぬ女の水溜り
故郷に緑の谷は持たざりき
日の丸をあまり責めてはなりませぬ

岸和田市　福浦勝晴

定年三句

定年の日の赤飯はちとわびし
積み上げた本ボツボツ読むと決め
人生は定年からさも強がりか
クジの列その末端にボクも居る

松原市　北野久子

耐えることに慣れて虚しいなぐり書き
言い過ぎを悔いる鏡が悲しすぎ

ひっそりと寄り添う老いに春の風
和やかに嫁と姑の針弾む

和歌山市　垂井千寿子

童心にかえりもつれた糸を断つ
その日から議長孤独の椅子につく
抱いた孫へ亡夫の顔を捜してる
反省の時間をくれた風邪の床

東大阪市　竹中綾女

建墓供養
紅白のお餅で祭る開眼式
墓出来て終の住みかの有る安堵
お墓吹く風よやさしく吹いとくれ
（生徒と四十年ぶり）
生きて逢えた事が嬉しいクラス会

松江市　小林孤呂二

あれだけの努力頬杖して聴かれ
銀行へお勤め視角を狭く生き
プラモデルのE2Cは子等に売れ
元号騒動明治の御代のお在します

今治市　越智一水

本当のつらさ涙も出てこない
嘘のない心で父の墓洗う
愚かなる母すばらしい愛を持ち
百科事典ではないマンガ読んでいる

島根県　堀江正朗

見られてる抵抗　正座崩されず
手に触れる広さで春を謳歌する
手さぐりの錯覚妻の目で埋めて
事あって知恵の狭さが痛いほど

大阪市　河井庸佑

借景の若草山は春がすみ
どうしたら怒るやろうとためされる
ポーカーフェイス肚の中では煮え返る
本心を見抜けぬ自分はがいがり

岡山県　白岩文衛

飯粒を拝んだ心忘れまい
妻の振るタクトへ合わす術覚え
涙溜めているとき一番美しい
針千本呑まねばならぬ痛み持ち

西宮市　若林草右

川柳をクッションにして不治に耐え
ちびた靴じっと見つめる松葉杖
七人のほかの一人にまだ克てず
九十度首を捻れば道があり

姫路市　梅谿庵不酔

足切りも知らず百度石まだ廻る
名前だけ相談役で崩れゆく
習字塾孫は顔にも書いている
目覚しよ寝たらあかんと捻子を巻き

鳥取県　清水一保

住み難い世とは云わずにとんび舞い
心眼を開けと絵筆ついて来ず
俺一人の月　病床の窓に見る
人の世を苦笑し落ちてる一円貨

八尾市　宮西弥生

膝関節骨折

冬の火事憎む骨折ここにいる
お見舞いの便り傷口に触れていず
人生のひと節だけの松葉杖
ひとの世に生きるひとりへ責め多し

羽曳野市　榎本吐来

香奠へ一票を買う名が混り
去年嘲った墓地売出しに耳を向け
相槌を打ってはみたが読めぬ肚
もう愛の言葉は口にせず夫婦

寝屋川市　高田博泉

首出した土筆を風が愛撫する
十年を区切りに愛を確める
公平な判断出来るだけの顔

柳井市　弘津柳慶

お二階へ声を掛けかけ上って来
大物と言われ姑息に生きている
子の自殺悔が次々追って来る

大阪市　西森花村

値上げして国鉄静かな春になり
戦禍からふるさと今は造成禍
造成地山の片身をはいで売り

下関市　国弘半休門

福祉国家へ政党色がなくなる

大宰府にて

大宰府の飛梅みくじの花も咲き
曲水の宴とは別の梅で飲み

愛媛県　渡辺暁童

老いの二人も　春暁の眠
財布の中も　つづく三寒
善処せぬうち　任期満了

松江市　柳栗鶴丸

他人から見ればおもろい夫婦かも
愚夫愚妻をヒューズでつないでる
三月や水仙本当の顔で笑み

仙台市　川村映輝

舌足らずと言うが一言多かった
山草の代わりに空かん置いて来る
テトラポット波静まって一休み

七尾市　松高秀峰

柳人の喜び選者と言う日あり
地方選近く看板屋の庭せまし
左遷とは知りつつ派手に踊ってる

松江市　梅本登美也

よごれ役天晴れこなし認められ

袖だたみ次のお成りを待つ姿
幹事長痛しかゆしの眼鏡拭く
大阪市　神田秀峰

無駄口はたたくが挨拶などしない
日祭日急患ジット耐えに耐え
見送りの老母は角で一雫
和泉市　井阪東天紅

幸せがこんなところで手をひろげ
すらすらと言えるも本当のことだから
波風もたてず笑くぼのある女
兵庫県　大江秋月

内孫の第一号は快男子
内孫が出来晩酌の味の良し
両親にはぐれた雀か庭に来る
大阪市　藤田頂留子

地下鉄網蓮根上の人通り
ごきぶりの殉死笑えぬ店仕舞い
マイホーム夢の借り家の昨日今日
大阪市　文川一念

残業の風にも春は近くなる
夢にだけ手をさしのべて来る天使
大空を流れる雲の自由席
大東市　土岐トク子

戻された見合い写真のホロ苦し
縁のないお人釣書折りたたむ
倖せに揺れる涙の角隠し
大阪市　神谷凡九郎

そろそろと人類終りかもネ進化論
人類を解く算数はおしえない
地球自転やまず進化論の明日
岡山県　直原七面山

髪黒く染めて恋
蛾にも蝶にもなる女
社長になってから孤独
大阪市　北勝美

軽くみるお金がバランス狂わせる
人間味阿呆な言葉に隠される
誇りもつ心へ善人小さ過ぎ
本田恵二朗

小さい小さい芽を老眼鏡がみつけ
おだやかに話せば頑固少し折れ
世話好きはよいがお口が軽すぎる
ほろ酔いが上手に嘘をついてみせ
ふところと値が折り合わぬ分譲地
菊沢小松園

長男は血の気の多い頃生れ
唸なされる鬼の寝顔を見たか見たか
青ざめた人だけ本当のことを知り
結んで開いてやがてこの子も悩むだろ
罪深い愛をなかなか諦めず

動物のたたかいとなる産油国
血で血を洗う指揮棒にホメイニ師
ベトナムが動きグラマン火をあげる
さみしきか明治のうれいバレンタイン
野党まで対症療法置薬

尼　緑之助

働かねばボケますのでと言っておく
愛憎の影　太陽のある限り
誰にでも開く自動ドアーだから嫌い
何もかもちびた私に春が来た
何げない素振りネクタイ買う女

川村好郎

金毘羅の石段を蹴る七十五
瀬戸内の漁業補償にガイド触れ
造船の不況瀬戸内視て歩き
ゆきずりの話しことばが胸を刺す
お荷になってはならぬお人好し

伊藤茶仏

八重山群島
星砂を探す浜辺は海が生き
テーブルサンゴ着き鎧を敷き重ね
マングローブの密林ボート蛇行して上る
サンゴ礁の石垣　重き年月を耐えている
全島ネムの木が茂って牛の餌になる

正本水客

啓蟄や今日はも古稀の誕生日
膝抱いて暮れるに遅き春ぞかし
ハミングで春の小川は堰を下り
原稿紙の白さに耐えている夜半
日想観家隆は深く手を合せ
（夕陽ヶ丘藤原家隆の墓）

西尾　栞

よろめいている良心をあぶながり
その先は神様に聞くことに決め
お食事は入れ歯を洗うまでかかり
この人は金になるなと歯医者の目
虚勢張るから友達が逃げて行き

浜田久米雄

水仙よりスキーのジァンプ端正に
遊学の娘の決心と花のペン
タンポポの絮に意志ありわが怯懦
その日以後語らず書かず娘を思い
苦楽園口のさくらを見に来いと

橘高薫風

神仏の冥加一身に受けて喜寿
九十まで生きよう会へはいらされ
停年へブレーキばかり踏んだ悔
年輪はほんとの嘘をよく見分け
ステッキをつく劣等感に術もなし

若本多久志

川柳太平記 (12)

慶紀逸の人と俳歴

東野大八

「誹風柳多留」百六十六篇が世に出るその前句付撰集の、息の長いベストセラー化のいわば先駆を成し、前座の役割を果たした世に識者の間で著名な「武玉川」の撰者は慶紀逸である。

紀逸は柄井川柳より二回り、すなわち二十四歳の年長者である。紀逸は元禄七年（一六九三）に出生。川柳は享保三年（一七一七）に出生した。ともに戌年（いぬ齢）である。紀逸が四十歳の享保十八年に点者として立机したのに対し、川柳は宝歴七年万句合を刊行し点者資格を得たのがこれまた四十歳である。この年回りの四十歳のエトが、共に丑歳（うし年）である。しかも、川柳は紀逸より五年だけ永生きしており、紀逸の三十回忌に相当する年に長逝している。こうみると、この川柳界の始祖格二人の因縁はまことに浅からぬものがあり、まことに興味深い。

「武玉川」は寛延三年（一七五〇）初篇を刊行し、宝暦六年（一七五六）に十篇を出し翌七年「燕都枝折」と改題し、五篇を出してその死とともに二代目紀逸を襲った四時楼がその業を継ぎ、再び「武玉川」の名により、明和八年（一七七一）から安永五年（一七七六）に三篇を出し、計十八篇の刊行をもって「武玉川」はその姿を消した。

紀逸は宝暦十一年「武玉川」（および燕都枝折）十五篇を出したあと、六十八歳で死去している。時に川柳四十四歳。その川柳が柳樽初篇を出したのが明和二年（一七六五）だから、紀逸死後四年目に当る。随って川柳の柳樽の礎稿には、当然「武玉川」の秀句の再録が一部行われる結果になった。

さて、「武玉川」を中心とした紀逸の俳歴に先立ち、まずその人となりについて記しておこう。正直なところ、この紀逸の家柄についてはこれという正確な資料はない。しかし古い川柳研究誌上に発表された前田雀郎編の「武玉川解題・撰者慶紀逸のこと」が、貴重な参考資料となった。以下その文献を中心に筆者の調査資料を加味して、慶紀逸の人となりを浮き彫りにしてみよう。

元禄七戌年（月日不詳）紀逸は、神田柳原近く現今の神田須田町二丁目の辺の鍛冶職の家に生れた。神田には鍛冶町というのが現存している。筆者の勤め先だった本社の所在地が鍛冶町だが、そこの古老にきいたところによると、家康入国と同時に開かれた城下町を明歴大火以後の新区制以後、神田は古町と呼ばれる一区画を成した。ここには職業による集団の町人街が多く、町名の呼称には、職業名がつけられた。すなわち大工町、材木町、瀬戸物町、炭町、伝馬町、畳町、鍛冶町といった二十余の町筋があった。紀逸は筆者の感

触からすれば、この現在の鍛冶町辺だと推定している。

ここは慶長の頃、一面の湿地帯でそれを埋めたて、城下町古参の商人街とした。随って町内の世話役は、町の開発に骨を折った有望な人物を名主に据えた。一名草創名主（くさわけなぬし）という。江戸ッ子といえば神田という自負はこの名門ぶりから生れた。

湿地帯の埋立地だけに、堤防の地固めには柳があてられた。この柳堤のあるところから「武玉川」九篇の序文にも「その頃は莫々たる柳諸のほとりに住て」とある。埋立地に柳堤、当然陽春の頃はつばくろの天地だ。江戸に名だたる吉原だって、当初は葭原といったように敷地は葭の原っぱを埋めたてたものだ。江戸を一名燕都としゃれたのも、菖蒲・杜若の乱れ咲く天地を、存分に飛び交うつばくろのさえずりの活況清新なさまからきたものとみてよい。武玉川第十一篇が「燕都枝折」と改題されたのは、こうしたムードに由来したものと思われる。枝折は柳でそれを栞とかけたのかもしれぬ。

ともあれ雀郎稿に還ろう。

紀逸の家は、幕府御用の鋳物師として名のあった椎名伊豫の末裔で、その椎名家四代目の兵庫を父とし、兄は清房（のち五代目伊豫を継ぐ）つまり椎名家の次男坊で、通称を伴人といった。雀郎稿には次の註釈がある。

―紀逸の通称を伴人（ばんじん）としたのは、浅草永住町の浄土宗了源寺の過去帖に、「前竜眼寺別当大享法印和尚」の施主として「椎名伴人慶紀逸」とあるところに拠った。この大享法印和尚というのは、紀逸の伯父に当る人で、ある事件に連座して延享三年八丈島へ流罪、宝暦四年同島で没している。この人もまた湖東と号して俳諧をよくした。

紀逸の「黄昏日記」に「三宅島の流人独吟一巻をなして点願はしきよし申し侍る。その奥に申しつかはし侍る」と前書して「物書けば遠くて近し浜千鳥」とあるのは、この流人となった伯父の大享法印和尚のことであろうとの説もあるが、如何のものであろう―

江戸生粋の職人の家に生れた次男坊の紀逸は、早くより好きな俳諧に遊んだらしく「武玉川」九篇の序に「予、若年のむかし、松月堂不角法橋は父の旧友なれば、それにたより五七五の文字を袖にかぞえて籠の道に入り侍る」とあり、年少既に立羽不角について俳諧を学んだことを述べている。

兄清房（五代目伊豫）も、嵐雪門の三田白峰に師事し、許人と号し俳諧をよくした。父といい、兄といいまた遠島流罪の悲運になかった伯父といい、俳諧一門の環境に身をおいた紀逸は、年少はじめて不角によって俳諧の眼を開いたが、ついでわが家の鼻の先に居を構えた三田白峰（すなわち兄の師）に、兄に伴われて出入りすることになる。

こうして白峰門にあること十余年、たまたま稲津祇空の東遊に会し、その人に参じて深く魂に触れるものがあったのであろう。過去の一切を擲って、その人が箱根湯元の石霜庵に終るまでこれに師事した。

祇空に対する紀逸の傾倒ぶりは、それまでの俳諧の師が肉身の縁につながるだけであったのに対し、祇空を自らの器量においてこれを師と仰いだ。紀逸はこの翁を得て、漸く俳諧の眼を開くことができたとしている。

かくて四十歳に近く、別に自らの産行とてなかったので、俳諧の宗匠として起つことを願い、享保十八年、深川老鼠の義子永機の二世湖十襲名披露の万句興行の時、祇空との縁故をもって、その席上、右湖十の紹介により其角座の判者の列に加わることになった。

「武玉川」初篇が出たのは、この立机より十七年後の寛延三年、即ち彼五十七歳の時であった。紀逸が我れをたのむにいかに慎重であったかがわかる。

誹風柳多留廿五篇研究

黄鈴木

—（二四丁）—

入江　勇・清　博美・八木敬一
西原　亮・青木迷朗・紀内恒久
鈴木　黄・室山三柳・岡田　甫

425　**びり出入かとせうちうをついで遣り**

入江—男女関係のゴタゴタ。せうちうは傷口の消毒。

室山—「ついで遣り」だから、気を静めるために強い酒を飲ませる、ともとれるが、やはり礎解か。

岡田—礎稿説のように、手傷を負っているのだろう。焼酎をついでやるのは、その手当てにもなるし、呑むためもある。

426　**さい日の矢とりしりだのあたまだの**

入江—藪入りに丁稚小僧が盛り場の矢場で遊ぶ。下手だからどこに当るか分らぬ。

　斉日の土弓こは〳〵矢を拾ひ　　筥一38

この矢を拾う女を矢返しといって、客が盛んに矢を射る間も、四ツ這いになって矢を拾い集める。客の中にはわざとその尻をねらって射るやつがあった。だから厚い尻綿を入れたという。

室山—同。矢場女にいわせたら、素人の矢。

岡田—同。

427　**おくれの髪をかき上ケて女いしゃ**

入江—おくれてのびた髪の毛。ここではシークレット・ヘア、中条流の女医の施術風景。

八木—賛。礎の通り、頭の毛ではない。

西原—同。余程長髪とみえる。

岡田—同。

428　**大日坊かいきてると七びゃうへ**

入江—「大日坊が生きてると七兵衛」とすれば、わかりやすい。屋島の敗戦後、陸に上った景清は、源氏の味方した伯父の大日坊を斬る。これより悪七兵衛と呼ばれるようになった。伯父が生きているなら「悪」の字はつかないものを。

室山—賛。ただし景清が叔父大日坊を殺したのは、屋島の敗戦後であろうか。「悪」は屋島以前からついているように思うが……。

岡田—賛。悪七兵衛の〈悪〉の字のついた年代をどなたかお調べ下さい。

429　**お末から初て見せた手をもふ二本**

入江—「お末」は、奥女中に仕えるお端下。「初手見せた手」は最初に見せた品、種類の意。岡田先生の「未詳」（拾遺229）に、張形を「自分が買うのではなく、主人からの注文」とある。

青木—賛。下五の「もふ二本」が面白い。特

別の意はないのだろうが、曲解を述べれば、注文を命じたのは、このお末の主人。求め手は二人。この二人意気投合の仲よしか？（一人で二本と見ても一向差支えない）「もふ」だから既に入手済みを勘定に入れると、三本？四本？

室山―同。が次次に見せて、註文のあったあと、それを見ていたお端下二人が相談、いちばん最初に見たのが自分たちに適当と判断、注文したとも考えられないこともない。

岡田―賛。解はいろいろなケースが考えられようが。

430 **あかるんたうんさいて遣るやす大屋**

入江―「うんさい」は地太畝織の木綿である雲斎織の略称。「遣る」は、岩付本には「出る」とする。「あかるむ」は、「赤らむ」の転。また赤疵の意もあり、「疵」はうち傷という語源説もあると『日本国語大辞典』は説く。

これらのことから「あかるんだ」は、穿き擦れて光った足袋底をいう。貧乏大屋がくたびれた足袋を穿いて出てきた。

西原―賛。「うんさい」は、雲斎足袋の略。『守貞漫稿』に「紺足袋は表紺染木綿、底紺雲斎」とあるから、紺が赤ちゃけてきたのである。

室山―同。「雲斎織」は、美作国の国津山の雲斎なる人物の創案という。目を斜めに織った厚い綿布、多く足袋の底に用いる。「雲斎織の袋足袋」などと『好色一代男』にも見える。

岡田―賛。

431 **大男白ふんどしでぬるく見へ**

入江―化粧廻しをしめると立派な関取だが、締め込みの白ふんどし姿だと間が抜けて見える。

古郷へハにしきをしめる角力取　七二・34

清―関取りと限定すべきや否や。

青木―この句の場合、「大男」＝関取説、賛。締込みまたは廻しの時、即ち土俵上の角力取りはきりっと見えるが、白ふんどしの時は間が抜けて見えるというのであろう。

室山―相撲取と限らぬ方がよいのではなかろうか。

岡田―やはり関取と思います。

432 **けつをまくってしりをだく切落し**

入江―「切り落し」は芝居の三等席で、時代によって変遷があった。最初は一階のますの後の平土間が全部。のちに割土間となり、切り落しは花道のわきに少し残って消滅。現代は、一・二等となった。ギュウギュウ詰め込まれたもので、座り方にコツがあった。男は本句のごとく尻をまくり、前の見物の尻を抱く格好に座ると楽。女は帯を前に回わして座ると楽になる。

前帯にするは功者な切落し　一一一・29

青木―賛。バレ句であろう。

室山―礎稿賛。「けつ」、「しり」、「だく」などの語を使っているが、バレではないと思う。そう見せかけたのが作者の自慢。

岡田―室山説に賛。バレではなく、バレ句めかした作。

433 **げい者でどらをうったのも百のうち**

入江―「芸者」の本義は、芸事に上達した者をいう。百人一首に後鳥羽院の「人もをし人も恨めしあぢきなくよをおもふゆへに物思ふ身は」がある。院は琵琶・蹴毬、とりわけ和歌にすぐれていたから芸達者といったのである。また、白拍子の亀菊を寵愛したので、「どらを打った」と当世語でいった。

綸言はみな亀菊が口うつし　一三・25

西原―賛。

踊り子にはまり切ったも一首入れ　六二・20

室山―礎解の「当世語」で来ておいて、「百のうち」でその人を暗示したところがおもしろい。

岡田―賛。

川柳のいのち

戸田古方

以前、テレビのスポットライトで、「八丈島のおかえ太鼓」というのを見ました。森にこだまし、波にこだまし、天にこだまする太鼓、からだから叩き出すリズム。素朴で豪快なひびきです。

バスを待っていた阪神百貨店のショーウインドからエレクトーンのショーが流れてきました。どうやらロックという種類のものらしいのです。随分喧しいものです。

これもテレビ、猪熊絃一郎画伯の抽象画の話です。顔には目、口、耳、鼻がありますが目、口、耳、鼻をひとつずつばらばらにすると、各々は不思議な美しさを見せるとか。

また、川柳とは何かを、性懲りもなく反趨しています。申すまでもなく、恩師麻生路郎先生はすでに

「川柳は十七音字の人間陶冶の詩」

といっておられます。路郎という師を偶像化しようというのではなく、この言葉そのものにいのちを見出したいのです。それで、

この不滅の言葉を、私なりに

「川柳とは十七音字の人間のつくった人間を人間にするうた」

といい直してみました。これを分析いたしますと、「われわれは人間である」と、もうひとつ「われわれは幸せを求める」となり、二つの接合点に川柳があると思えるのです。

太鼓はドラムに通じるもの、ロック、そして抽象的な造形、いずれも、今まで、未開として顧みられなかった黒人の世界から持ち込まれたものでした。西洋文明の行き詰りを打ち開くのにこの一世紀来大きな働きと意義をもってまいりました。

さて、「われわれは人間である」ですが、現実に、われわれ人間とは一体どんなものでしょうか。

まず環境から見ていくことにいたしましょう。人間の住んでいるのはいうまでもなく地球です。地球も生きていますので、動いたり変ったりしますが、人間のことをかまっているわけではありません。

地震、雷、火事、親父と申しますが、嫌なことばかりです。殊に、しまいの「親父」は権力のことをいっております。「泣く子と地頭に勝てぬ」といい、「主人と親は無理をいうもの」ということに慣らされてきたのでした。その権力を縦横に振り舞わして、世界の未開民族を征服したのがヨーロッパの人々でした。やがて、これらの未開の人々が成長して、シッペイ返えしをし始めると、西洋文明は行詰りをみせてきたのです。そして、この未開の文化が打開のみちを見つけさせているのです。それが、黒人文化のドラムであり、ロックであり、抽象的な造形であったのです。イギリスの歴史学者トインビーも前向きに東洋の心に憧れました。ブルーノ・タウトは桂離宮の美に震えました。

さて日本の環境はどうでしょうか。一口に申しますと、甘えかされながら痛めつけられてきたのでした。日本では世界のどこよりも四季の季感を楽しむことができます。だが地球の持つあらゆる天災も容赦しません。長いものに巻かれるという日本人の気性もこの辺から生れたのでしょう。

さて、この四季の季感から生れ、季語を守って美の世界に生きようとするのが俳句。俳句は純粋客観の中にその格好よさを誇っている点がないわけでもありません。だが俳句のもと、川柳のもとでもあった俳諧はもっと生臭いものであったはずです。

京都は美しく、優しいところ。だがこの美しさは優しさからだけから来ているのではありません。京都の美しさを支えているものの奥にはいささかな強さがあるのです。千年の古都のみどころは古いものの良さ、美しさでしょうが、京都には色々妙な日本一があります。疏水、水力発電、ほか。京都の自然からは似ても似つかぬ近代的エネルギーの所産です。宇治の料亭に生れ育った革新の闘士もおりました。それは縄文土器のいやらしさの持つ美しさに通ずるものがあります。あの厳しい底冷えに耐えて、鍛え上げられたのかもしれません。

さて、話は理想追及の命題「われわれは幸せを求める」へ移りましょう。

美を求める日本人の生活の根源には、およそ美とは似ても似つかぬものが秘んでいる。そのいやらしさ。中国古代の哲人は人間は性善か、性悪かを論じています。あくせく明け暮れている我等、性悪としか見られないのです。だが、このいやらしさのでてくる由来には、生き抜こうとする意思、幸いになりたいという憧れを見落すわけにはまいりません。これはきわめて美しいものです。

民主主義の命題の一つ、基本的人権は「人は何びとにも譲ることのできぬものを持っている」ということですが、釈迦の誕生の場に出てくる「天上天下唯我独尊」も「人は幸福になり得るタネを持っている」との宣言だったのです。そこで、奥の奥の奥は性善だったんだなということになります。

人はそうしたタネをもちながら、毎日喜怒哀楽を繰返えしているのです。つまり、いやらしさの姿、それこそ、喜怒哀楽の本質なのです。それを追い求めていくと、人間のもつ垢ということにたどり着きます。人間にまつわる垢の自覚と分析、そしてそれからの脱皮、それが川柳のいのちのように思えてくるのです。垢の自覚の除去。除去するものが何かわからずして除去はあり得ません。

ドロドロの、ベチャベチャの、ビチャビチャの、ニチャニチャのもの、この根源を見極わめる、それが川柳とちがうでしょうか。格好よく振舞おうとする面の皮をひんむいたとき、ほんとうの美しいものとの出会になるのです。蓮の花が泥の中からこそ生れるように美しい真っ白い蓮の花を開かすものが川柳なんです。

その時、人間は真の人間となれ、不変の幸せを得るのです。

一分間の柳論

野田素身郎

句会は、入選を競うところなのか、それとも作句習練の場なのだろうか。私は、習練の場と位置づけている。従って、大会であろうが、小句会であろうが、出席したからには作句に全力を尽し、謙虚に選者に句を託すことにしている。

入選を競い、成績を争うことを第一義とすれば、選者の好みに合せて作句し、いわゆる選者当て込みの句を出句することにもなる。果たして、そうして入選した句が自分の句といえるのだろうか。選者当て込みの句がその人の句といえるのか。選者のためのものであって、自分の句ではないと、私は思う。

私は、選者に迎合し、選者の好む句を作るために貴重な時間を費やす愚は、避けたいと考えている。選者におもねることなく自己の主張を自分の表現で十七音字に託した自分の句を、私は作り続けたい。そこから、命ある句が生まれることを確信しつつ。

万葉抄

川村好郎選

小心へ夜の秒針遅々として
ひと言が薄い友情消してゆく
ため息をためて女の灰皿よ
気紛れな春に惑う花蕾

広島市　光井みほ

タイマーへ頼らぬ明日の米を研ぐ
いいところだけを習えと親のエゴ
灰汁抜きも過ぎれば風味失われ
再建の旗へ惜しまぬ母の風

福山市　桑田静子

逆らわぬ性の重たさ落椿
持ち時間気になり出してからの趣味
何も残らないなんて嘘です紙吹雪
鬼千匹　鬼になれない女がひとり

八尾市　高杉千歩

文字にしたら胸の手紙が消えそうで
優しさで包む嘘なら許される
倖せな証拠明日が怖くなる
くつろぎは勿体なくも夫の留守

和歌山市　浦野和子

紫のベールをかくれみのにする
老二人せめて欠伸を誇張する
火の車見せない母の舞台裏
背負い込んだ苦労を神が見つめてる

和歌山市　坂口公子

一筋に愛していま福寿草
あるときはにがい薬になる失意
別離の譜　春雪の野へこぼしつつ
春風にロマンの欲しいひとり旅

竹原市　古田鈍舟

ポスターの顔が話題にされる市議
バーゲンで買ってねむったままの服
祝いより先に届いたお赤飯

京都市　松川芳子

似合うかと聞かれて似合うと答えとき
今治市　渡辺南奉

目が覚めた今日も生きてるそれでよし
握手の手放せば後もう見まい
切り詰めて女貯金を盾にする
出張のホームシックをのぞく月
竹原市　岩本寛子

思案橋女としての下駄の音
雨あがり一人相撲はもうよそう
あとおしの妻のヒップがまんまるい
だしとネギそれで素うどんひるまない
和歌山市　福本英子

春雪のワルツへ似合う紅椿
枯れ芝へ雑草の芽の面憎い
巣造りの雀夫婦に妬ける春
岡山市　原田凡太郎

散る花よわが逡巡を笑うべし
ミシン踏みながら聞いてる花便り
お花見に来ても労働歌をうたい
新宮市　辻弋

夫の背に今朝も黄色の旗を振る
丸すぎて軽すぎて毬転がされ
大欠伸拾ってくれる妻がいる
鳥取県　加藤茶人

陽光へ翼は閉じたまま二浪
体制がどうあれ働き蜂でいる
椿落つポックリ寺の門叩く
大阪市　堀口欣一

順法の名で横着が認められ
それもよし降りこめられる京の春
登美子忌の小浜ひねもす雨となり
岡山市　船越汽水

手術日の一日前の迷いかな
きっと涙が看護の妻にあるだろう
点滴は納得させる時を持ち
岡山市　串田句昧地

此の船に乗らねばならぬ向い風
従いてゆく気になって嫁に親しまれ
近道と信じた隘路の橋が落ち
和歌山市　堀端三男

思い出の駄菓子見つけた峠茶屋
人生の廻わり舞台で出番待つ
限界を悟り娘の言を入れ
八尾市　田中紀美代

むずかしい顔して逢いに出る時は
宿業を逆手に女らしく生き
地方選近づき工事急ピッチ
出雲市　吉岡きみえ

負けて勝つおんなに打算あるかぎり
老い坂にむかう夫婦に春嵐

これでも夫婦かと思う日もありて
東予市　小山悠泉

すぐ腹を立てる夫の正義感
鈴の音に伊豫路の春は真盛り
君が代へ膝正す父笑えない
兵庫県　野々口ゆう也

三っ指つかぬ女房それでよい
送り出す妻は鎖りの端をもち
悟りとは別に余生組んでみる
唐津市　桧垣岩光

若者の怒りを波は聞いてくれ
分校にわらびがのびて春が来る
春の風プレスのきいた服で出る
高槻市　竹内花代子

当然の躾を母はためろうて
夢にまで痛さがのこる五十肩
水取の行事テレビでぬくう見る
旭川市　朝倉大柏

帰省した東京弁が眠らせず
親の手に上がらぬ凧を子に引かせ
老妻の欠伸うつって寝るとする
羽曳野市　麻野秋畝

地下街で迷う十年振りのキタ
老いぬれば波風避ける道を選り
姿見に写る着付けは春の彩
呉市　山根喜代美

ピリオドを打って余燼がなおも燃え
冬の画布　愛のメロディーさえも冷え
寝屋川市　高田てまり

崩れゆく積木のような私の心
良心の真ん中で崩れる積木かな
岡山県　二宗吟平

聞かなんだ知らなんだふり丸うすみ
誤診だと心の隅にこびりつき
鳥取市　武田帆雀

福豆が障子にとまったままの朝
子の描く海青々と塗りつぶし
和歌山市　瀧谷右郎

年度末桜よ少し待ってくれ
花札の賭けは妻の肩をもむ
岸和田市　古野ひで

豆数う団らんからは鬼も逃げ
合掌の指から煩悩こぼれ落ち
松江市　竹内寿美

本番はまだ鶯リハーサル中
不足ない御年ですねと軽く言う
富田林市　中村優

立前を透かせばコネと金が活き
自画像のポイント二本の皺が寄り
広島市　すがかつこ

行方不明になりたいような春かすみ
寝屋川市　小林鯛牙子

ペン怒るくらいの若さは持っている
熊本市　有働芳仙

水仙の香を磨いてる海の風
西宮市　山田喜代子

仲ように娘の雛と嫁の雛
米子市　野口美世

採用の通知目覚し買いに出る
岡山県　池田半仙

戦争と縁の切れない地球かな
東大阪市　萩尾真佐志

一日の終りは入歯を抜くわびし
名古屋市　越村枯梢

高いびき慣れてやすらか老夫婦
八戸市　島田昭治

病床に愚痴さえ言えぬ老母いとし
佐渡郡　高野不二

因習の風よそ者に強過ぎる
倉吉市　野中御前

パン食で育ちベッドで寝る日本
太らせた豚を眺めて胸算用

お人よしだけを子供に受けつがれ
残菊の名香漂よう舞扇

ストーブで聞くエヤコンのコマーシャル
島根県　角耕草

町内会上座にすわる齢佗びし
残雪を頬張って打つ山畑

凍てた朝新聞牛乳チャンとあり
早春の陽ざしを連れて牛歩く

バイキング育ちがモロに出てしまい
尼崎市　中谷利美

どたん場になればなんとかなる不思議

抑圧の限界鉢の小盆栽
マネキンと違うあなたに無理な柄
唐津市　田中紫浪

使い捨てのライター以て瞑すべし
ビジネスのホテルにロマン落ちていず

子がまねく都会へふんぎりまだつかず
高槻市　大垣たもつ

壇家には済まぬ給料取りになり

ごめんねと喉のとこまできているに

理解する父の尺度が古すぎる
豊中市　満仲きく子

春愁を笛吹きケトルが慰める

春の雨楽しいことがありそうな
羽島市　伊藤静枝

バーゲンの毛皮着れます春の雪

転居ずれふるさと持たぬ子が育ち

負けたなら涙涸れるまで泣いてみな

泣きに来た私を抱く春の海
出雲市　石倉芙佐子

影も又すこうし肩を張っている
兵庫県　高橋近郊

小遣いの切れ目を繋ぐ年金日
舎利経になって小さく妻唱和
岸和田市　狭間希久志

日々平和一歩控えた妻がいて
赤のれん窓際族の涙見る
諫早市　江副二牛

結ばれる予感がしたとのろけられ
厄払い男盛りの顔の艶
大阪市　野田君枝

床の中胸の小箱を開けてみる
ベトナムは火薬のにおいの消えぬ国
鳥取県　石井雅水

ペンだこをいたわり深夜のガリを切る
慇懃な皮を冷たい笑みで消し
羽咋市　三宅ろ亭

番外地へそっと顔出す蕗のとう
帳尻りを合わそうとせず食い盛り
東広島市　石井さわ子

ストーブも四十女のぐちを聞く
一月の妻はゆっくり化粧する
出雲市　森山健太郎

テープカット人の歩けぬ道出来る
花束贈呈再婚だとて素晴らしい
尾鷲市　渡辺伊津志

喝采のない道歩く人の母
新聞のコラムが愚痴を斬り捨てる
藤井寺市　中原比呂志

鉛筆が走るインスピレーション消えぬ間に
大胆な決意うながす恋心
尼崎市　中塚喜甲

身内にはさも有難きお経なり
暗示めく医師の言葉に負けられぬ
大阪市　小谷清女

春の夢長蛇の列の宝くじ
裏話どちらも狐と狸なり
長崎県　岩崎和子

痛いとこ衝かれてからの目のやりば
マスコミが切れぬ絆を切りたがり
大和高田市　岸本豊平次

相談に行ける悩みはまだましか
はいはいと聞いて出方を練る思案
大阪市　津山刀水

他人には判らぬ淋しい膣を抱く
ふり返りもう一度お宮へ念を押し
岡山市　砂田静佳

何かあった無口の父の口軽く

年金のおかげ温泉宿の湯気
山口県　高崎雀声

五つ子を見つつ一人子もてあます
泉佐野市　大工静子

鉄筋の谷間の畠に耕音機
（前月分）
尼崎市　中辻千子

クラス会夢みて当分精を出し
岡山県　岩道博友

返答の要らない電話で怒鳴られる
出雲市　園山多賀子

子に睹けたさいころ枠からはみ出して
出雲市　園山栄

参観日値踏みをされている着物
橋本市　岩倉天彦

そう言えば牛を見かけぬ故郷の畑
今治市　矢野佳雲

好きならば嫁けと最大限譲歩
浜田市　佐々木裕

七人の敵の視線が背に重い
鳥取県　山根峰雪

長寿法なるほどと聞き続けない
倉敷市　中島彩平

大臣の失敗辞職で事が済み
倉吉市　一風庵

遅配した賀状が残る後遺症
島根県　星野侑正

すねるだけすねて娘の黙秘権
唐津市　田口虹汀

滝となる水も河鹿と住むゆとり
唐津市　山下勝一

五ツ子は世上の愛に育くまれ
尼崎市　中辻千子

つとめ終えフト腰のばす五十坂
橿原市　西本保夫

嘱託の立場で原文つくらされ
大阪市　平井露芳

デパートで泳ぐ人間見る魚
兵庫県　中田白李

預金出す番号札の手のぬくみ
大阪市　鶴園ハルエ

ドレスでも勝負している人気歌手
寝屋川市　福富隆子

離婚劇子はかすがいに成らぬ世か
唐津市　岩崎実

手の位置をかえて思案が深くなり
総社市　水子つるえ

ことづける中味のうすい御香料
熊本市　北川一進

油汗自分だけ知る自己管理
島根県　岩田三和

しばらくは空気と水で生きる幹

倉敷市　大森登竜

幾星霜眠りを覚ます分譲地

岡山市　井上柳五郎

半農の歎き日曜またも雨

徳山市　徳重馬笑

八十路なお青春の夢を抱く

橋本市　森脇善太

叱ったあとの頬に絡んだ春の風

鳥取県　和井観洋

横へ来て座る好意をもてあまし

島根県　木村はじめ

疑えと教える世相の悲しさよ

大阪市　白石潔

油切れて丁度定年やってくる

川西市　氏林洋敏

あっさりと別れて自分らしくない

倉吉市　田民碧水

若夫婦磨くが日課マイホーム

青森県　波ただお

スイセンの芽生え楽しい季節感

熊野市　西久保貢

合格は母でないのに大手振り

兵庫県　川井白峯

病床に冬の重みを背負い居り

鳥取市　中森葉士人

裸木に三寒四温の対話あり

出雲市　板垣夢酔

合槌を打ったばかりに長電話

島根県　山本博也

透明な魂欲しく窓を拭く

豊中市　田中善四郎

不景気に贅沢を売るコマーシャル

松江市　黒目大鳥

宿命の糸に大望あやつられ

岡山市　花田たけ志

吉日が近く枯れたは伏せておく

大阪市　藤森小雅子

落ちこぼれ同士で小春の日向ぼっこ

島根県　松本文子

一つがいのチャボに教わる夫婦愛

青森県　五十嵐操史

売る山羊の毛並み手を貸し別れ告げ

堺市　檀野茂子

自由結婚そんな言葉もなつかしく

西宮市　谷口信夫

親戚と思って入る古本屋

★

名古屋市　**鈴木可香**

坊ちゃんを信じて犬の無抵抗

万歳三唱今日の大会幕を閉じ
出すときは出す会長で人がつき
寒行かそうか団地は喜捨もなし
座席獲得遠慮会釈のない若手

大洲市　米沢暁明

神様が補欠入学拝われる
紳士買などと見栄はるのも女
退職金手直し今年辞めようか
子の命こんなに安く誰がした
あほらしい夫婦の賭けは賭けただけ

岐阜市　市川鱗魚

冬の靴履いて真実を探す旅
足枷を妻はさからったりしない
風に罪をきけば女は深手すぎ
ライバルの視野からにげる道を曲げ
吹き溜り政治をほめて邪魔にされ

東京都　池口呑歩

たまらなく悲しい夜を酔えぬ酒
逆転の時代に明日が判らない
地球儀に亡命先がない平和
仮りの世の仮りの姿に伸びる髭
墓洗い自分の入る日を思い

新緑・四国の旅

川柳塔本社親睦吟行会

日時　**昭和54年5月18日（金）大阪港21時40分発**
（句会は道後温泉・青海楼19日14時）

挨拶　川柳評論家　東野大八氏

講演　愛媛川柳松山文化連盟会長　仲川たけし氏

兼題
「愛」　長野文庫選
「香」　三井酔夢選
「高」　月原宵明選
「徳」　野村太茂津選
「林（栗林公園）」　橘高薫風選
「嶺（讃岐富士）」　菊沢小松園選
「坊ちゃん」　川村好郎選
「狸」　西尾栞選
（席題なし・各題三句吐）

懇親宴のみ参加費は三五〇〇円

会費　**二万五千円（スケジュールは前号参照）**
―四国方面の方のご出席をお待ち申します。
―バスに人数制限がありますので至急申し込んでください。（窓口・鬼遊・岳人）

主催　川柳塔社

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

若柳潮花

這いあがる獅子にはなれぬ子の自殺

有信新之助

獅子は子を千仞の谷底に蹴落し、その子は谷底から這いあがると言うが、はたして人の子は親はどうであろう。子は死を選び親は惑うこれが昭和のあり方としたら悲しいですね

お勝手の窓から明ける妻の朝

藤村 〆女

朝食の仕度をする甲斐がいしい母の姿が眼に浮んでくる。仕合な一日の出発だ元気でね

海峡の夜霧悪魔の吐く息か

野田素身郎

かさなりあってゆく夜霧の深さを悪魔の吐く息と表現された素身郎さんに頭をさげたい気持です。老練な表現だと思います。

浅漬の歯音に喜寿のまだ達者

久家代仕男

浅漬を噛む老の歯音が聞えるような気がします淡ましい限りです。米寿も白寿も噛みつづけて下さい健康でね。

盲導犬ちょこんと青を待っている

江口 度

シグナルが青になって周囲の人が動き出すまで犬は動かない。主人の生命を大切に守っているのである。ちょこんとが可愛い。

百合匂う雨にうたれた過去見せず

八木 千代

過去の姿を語らずあまい匂いを放って生命の限り咲いている百合の花は美しい。人もまたその過去を見せず咲いていることだろう。

雑草のいのち舗道を裂いて伸び

林 露杖

舗道のわずかな裂目から出ている野草が花を付けているのを見る。いかにも露杖氏の言われるように雑草が舗道を突き破って伸びているように見えるから面白い。

古木すら春になるのを拒まない

高橋 夕花

古木老いたりと言えど春を待つ心に変りはない。朽ちかけた木の枝に咲いた一輪の花。小鳥は来なくとも、散りぎわがどうあろうとも一と花咲かせる春が欲しいのは人も同じことが言えるだろう。

泳いでも泳いでも夫の掌の窪で

河野 君子

その窪からこぼれ落ちたとしたらどうであろう。仕合だろうか私はそうであるとは思えない。泳いでも泳いでもの表現が好きである。

冬のない冬に樹木はあくびする

板尾 岳人

冬のない冬とは今年のような暖冬を云うのだろう。冬山を愛する若人達にとって雪のない山は山でないのかも知れない。冬の山は樹木が欠伸をしないきびしい雪山であって欲しい、冬山を愛する人のために。

枯葉同士話し合ってる吹き溜り

行天 千代

風に吹きよせられた枯葉が何を話し合っているのか。生れた土に返る日のことか、冬の陽溜りは暖かい。私はこの句に地下道に夢見る吹溜りの人達のことを思う。

生る汗たしかな妻の鼾聞く

江城 修史

健康な鼾に明日の仕合がある。正に働く者の詩である。

千鳥とぶとぶ墨絵の渦が音になる

正本 水客

王青先生えがく千福寺の襖絵を眼に見るようである。水客君得意の句である。

温泉の窓の雪は冷たいものでなし

西尾 栞

温まった頬に飛び込んでくる雪は心よいものである。冬の温泉を言い得て嬉しい。

秀句鑑賞

―水煙抄―

―前月号から―

小野克枝

肘ついた女の姿勢の哀しさよ

桑田　静子

この句を読んで私はすぐ竹久夢二の絵の女を思いました。哀愁に満ちた女です。姿勢というと少し軽い感じがいたしますので姿態といいたいのですが、それではまた極端に水商売の女を連想してしまいそう。とにかく、女が肘をつく時の愁いがよく出ています。

裏返る亀休日の夫かも

福本　英子

亀が裏返りになった時は、それは必死なものなので、この句はおかしいなどと理屈を言ってしまえば面白くありません。首を反り、手足をバタバタさせて、ユーモア的、お腹を放り出してひっくりかえっている亭主と一脈通じるものがあると私も思うのです。

親として人間として曲げられぬ

中原比呂志

私的、公的のどちらにも悖ることですからけじめは通さねばなりません。ここが躾の肝腎なところだと厳しい態度になります。

春の顔見せに雀が窓へ来る

竹内花代子

雀の可愛さを強調するのに、今までこのように表現した人があるでしょうか。良寛や一茶のような純な和やいだお心の持主ですね。

酒飲めぬ男真っ先き下座につき

三宅　ろ亭

酒席へ出る機会はめったにない私ですが、この句は良く理解出来ます。そして男にとっては、大酒を飲めることも、一つの力、才能のようなものだと思い当るのです。

父よりも倍生き残すものがない

池田　半仙

世の中長生きをして偉い人もあれば若死でも立派な人がいるものです。この父は後者です。さて自分はと云うと、二代目の非才をかこつばかり。

所詮は他人どこかでそんなこと思う

石倉美佐子

軽い言いまわしの句ですが、とても深い意味を教えられます。上句の突き放した言葉を反芻している気持の伺えるのが「どこかで」という四文字です。

タコ焼の油引から見つめてる

内藤ますえ

タコ焼を買う楽しさの中には、手際よく焼き上がるまでの経過があり、こんなことまで句になるものだと気付かせて戴きました。

近道を教えてくれたので迷い

桧垣　岩光

「あなた凄く遠回りして来たのね。あそこの角を斜めに来ればずっと近いのよ。」と言われたばかりに馴れぬ道を辿って迷ってしまい結果はもう一つ遠回りをする羽目です。経験をすぐ句に仕立てられる作者の強味です。

みかん一つ炬燵の上で不寝番

串田句眛地

凝人法の句ですが、不寝番とは意表の感覚に思われます。それがこの句のポイントになっていて成程とうなずかせます。

山を切りひらいた校歌それもよし

竹内　紫錦

山の美しく川の清らかなことを賞揚したのが今までの校歌だったのですが、こうも開発が進んでくると、自然破壊の上に建つ学校も多く出来るわけです。下五が優れているので力強く感じられますし、従来の良き時代の校歌を踏まえていることにも作者の力量が窺えると思います。

聖書読み心澄みたる日の遠く

村上由希子

この作品からは、青春も遠くなったなあとの感慨が深く伝わって来ます。私のような何かに追われ続けてあくせくしている中年女には聖書を読んで心澄むようなこともなかったように思われ、淋しさ一ぱいです。

冬に咲く花たかぶりなど見えず

山本　博也

夏のカンナの花と冬の椿、同じ赤い花でも感じは全く異ります。すばらしい把握ですね。

旅の郵便貯金

西尾栞

私が旅に出て記念郵便貯金を始めたのは、昭和四十五年の九月七日のことであった。その通帳の第一欄には、熱海駅前郵便局の判が捺してある。記念貯金というのは、私が旅行した先々の土地の郵便局へ立ち寄って、そこで自分なりの壱千円宛の貯金をして、某年某月某日その地へ旅行した記念の思い出としているものである

この記念貯金は、仲々貯まらないものである。というのは私等の旅行は大抵土曜日から日曜日にかけて一泊二日の旅行が多いので、目的地へ着いた土曜日は既に午後で郵便局は閉まっている。日曜日は勿論駄目である。

それで、たまにあるウィークデーのグループの小旅行がかきいれどきで、目的地へ着くと、近くにいる土地の人にこの辺に郵便局はありませんかと訊ねると、ポストならそこの煙草屋の前にありますよと、いとも簡単に教えてくれるのだが、こちらは特定郵便局でもよいから郵便局を探しているのである。

グループの連中は、何だ何だと訊ねてくれて、そのわけを話すと、仲々しゃれたことをやってるじゃないか、どれどれと貯金通帳を見て、第一欄の熱海駅前の局名を見て、「之は誰と行った時だ」と詰問されたことがある。

熱海の改札二枚ずつ二枚ずつ

という光景を憶測してのことであろう。

第三欄以下六行は、北海道旅行を家内同伴で、珊瑚婚祝に行った時のもので、それこそ思い出の記念の貯金である。

網走、宇登呂、斜里、広尾、えりも岬、支笏湖と昭和四十六年九月十七日から九月二十一日迄の六欄である。ここの思い出は網走の刑務所を小高い丘から眺めてその下の料理旅館で中食をした時のことであった。早速旅館の人に、郵便局を訊ねると、ここから約五百米程行くとありますよという返事に私が困った顔をすると、どんな御用事ですかと訊いてくれた。こうこうしかじかだと話すと、それじゃ皆さんとお食事中にライトバンで一走り行ってきましょうと心よく走ってくれたのには有難かった。次の広尾の時も矢張り昼食の時であった。柳の下には鰌はいないの譬の通り、網走のようにはゆかず、自転車を借りて往復二十五分程のところを走った。帰って見ると石狩鍋の中食は殆んどすんでいて、家内がやっと確保しておいてくれた石狩鍋の中に兵隊の襟章程の鮭の一片が浮いていた。未だに覚えているところをみると、昔から食べ物の怨みは怖ろしいとはよく言ったものである。次の襟裳岬は身体ごと風にもってゆかれるかと思う凄い風の中を局迄走って行ったことをおぼえている。

北海道最後の支笏湖の郵便局は、支笏湖を前にした大変眺望の良い局であった。そして私の通帳を見た局の人は、良い御趣味ですねと言って愛想笑いをしてくれた。碧い九月の湖を前にした眺めの良い局に勤めていると、こんなにも心に余裕が出来るものかと感心して、矢張り人間は環境の動物だなあと思った。

この北海道旅行のスケジュールは道内は全部バスツアーで、私のこの貯金を知ったツアーの人達は本当に協力的で、バスの窓から郵便局が見えると、西尾さん郵便局がありま

よと教えてくれた。「有難う」と言ってバスを停めてもらって走って行ったら、今日は日曜日だったという札幌の哀しい思い出もある。

昭和四十八年五月十四日の松江郵便局のこの判は、尼緑之助氏の句碑建立に行った時に中川晃男氏が案内してくれて貯金したものである。それから年に一度の晃男さんからの年賀状にはきまって記念貯金も大分貯まりましたでしょうと今年も書いてくれていた。他人の趣味をよく憶えていて下さる温かい心の人である。その後晃男さんを瞼に浮べる思い出の人となった。

この貯金は大体壱千円が基準でやって来ているが、昭和五十年二月二十二日の、城崎郵便局の預金だけは、金壱千六百円になっている。それは前の晩に中国文化研究会（麻雀）に参加して最後の計算に六百円浮いたので、その収穫を加えて千六百円の貯金となったものである。之も旅のつれづれの思い出の一つである。

良い思い出許りではない。こんな事もあった。それは昭和五十三年八月十八日に東京上野駅前の郵便局のハプニングである。上越線の猿ヶ京温泉で開催される俳句の「鯉」の発行所の夏行に参加する為、上野駅で急行佐渡三号を待ち合せる約三十分を利用して駅前の郵便局へ跳びこんだ時の事である。局は昼の休憩中であった。だから一時迄仕事は休みだという。私は十三時十分の急行に乗る旅の者だから洵に勝手だが一時迄待っていては列車に乗り遅れるから枉げてやってくれと言う。窓口の女事務員のうちの一人は編物をしていたし、一人は本を読んでいた。誰も相手にしてくれない。些かむっとした私は局長は誰だと少し大声をたてたら、正面の机からそれらしい人が起って来て、組合の規則で一時迄待ってもらうより致し方がないと言う。それじゃ管理職の貴方がやってくれては如何かと言うと、一寸女事務員の方を見やって黙ってしまった。とりつく島もない、時間は刻々経ってゆく。

「もう！たのまねえや、てめんち、長生きしろよ、パッカヤロー」と、河内弁が途端に江戸ッ子になって、ぐっと睨め返して局を跳び出した。という悪い思い出の一幕もあった。

之によく似た最近のハプニングは沖縄の名護郵便局である。日付は昭和五十四年二月十日となっている。その日は土曜日だった。丁度四〇名のバスツアーで名護の賑かな街へ入ったのは十一時五十五分位だったろうか、例によって運転手に郵便局を訊ねると、局迄は少しありますよ、この道を右へ入って突き当りを左へ曲って云々という。じゃ此所で下ろしてくれと停めてもらって、タクシーを拾うとにした。二月とは言え南国の沖縄の観光バスは冷房を入れている。街はもうギラギラとする強い日射しである。タクシーは仲々やって来ない。やっと来たタクシーに乗って郵便局へやってくれと息急く。局へ着くとシャッターが半分下ろされている。そこをかいくぐって、中へ入るとまっ暗で、ローソクの焔がゆらゆらとゆれている。停電らしい。時計を見ると十二時二分である。時間外で洵にすまないが旅の者で記念貯金をしているものだから是非受付けて欲しいと頼むと、ここでも

ふあうすと川柳社
50周年記念川柳大会

日　時　6月3日（日）午前10時から
会　場　兵庫県農業会館11階大ホール（阪神元町駅南二百米・大丸百貨店隣）
会　費　千円（記念品呈）発表誌三百円
題と選者
「踏　む」　**藤田きよし選**
「世　代」　**北川絢一朗選**
「　姉　」　**鈴木丙午郎選**
「りぼん」　**平野文彦選**
「うたう」　**佐伯みどり選**
「静　か」　**岸本吟一選**
「住　む」　**三条東洋樹選**
「きれい」　**藤島茶六選**
「　扉　」　**西尾栞選**
「　根　」　**増井不二也謝選**
（各題二句吐）
（前夜祭など既報）

二人の女事務員が居って、窓口は既に下ろされてローソクの暗い灯で今日の出入を〆めている最中であった。局長さんらしい人が出て来て、一寸当惑した様子であったが、通帳とお金を受けとって、唯今は生憎停電だから機械操作は出来ないが手押しでよろしいかと言って、事務員の後から手を伸ばして、昭和五十四年二月十日の判と名護郵便局の印を捺してくれた。時間外の事で局長さんもあわてていたのか慣れていないのか、下の欄に捺す局長印を捺し忘れていた。自分もあわてていて上野駅のような事でなかった嬉しさに急いでそのままポケットに入れて半シャッターの下をくぐった。だから通帳には今も尚名護郵便局長の判の一箇所がブランクになっている。

この名護局の貯金をする為に、往復タクシーを使った。思えば涙ぐましい貯金である。でも名護のタクシーは小型で片道二二〇円であったことは幸であった。

こういうふうにこの貯金は、大げさに云えば一分一秒を争うので常に、住所氏名金額を書き入れた貯金預入票を数枚用意しておかなければならないのである。

この間迄この通帳の一番南は屋久島郵便局だったがこの二月で、北は北海道から南は沖縄迄、八十二の郵便局を廻っている。そして二冊目の通帳はもうすぐ満了である。残高は八九、九九七円であってその内利息が七、三九七円ついている。この通帳はこの頃テレビで流行っている私の宝物であり唯一の遺産である。孫が七人居るが、どの孫がこの遺産を引きついでやってくれるか今のところ見当がつかない。

この通帳の利点を挙げると、あそこへ旅行した時は何年何月何日だったか思い出すのに便利であると同時に又、重要なアリバイ証明にもなっていることである。

唯今、通帳の最後の欄は、昭和五十四年二月二十七日の新潟県湯沢郵便局の判が捺されている。「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」という書き出しの小説雪国の越後湯沢の郵便局である。昨夜泊った旅館タカハシホテルは、曾て川端康成が雪国を書いた旅館である。芸者駒子のイメージを追ったが、もうそんなロマンも何もない。スキーをかついだ若い男女のカラフルなスノーラックの姿が出入りするだけであった。つぎたしの廊下の果ての湯槽につかって目を閉じると

雪しんしん駒子の影がふとよぎり

と口をついて出た。

翌日、越後湯沢の郵便局を出ると、真向いの店で駒子餅を蒸す蒸籠の湯気が上っていた。越後湯沢の二ン月の風は肌を射すように冷めたかった。

雅号ぶっちゃけばなし (178)

きぎゅう

はやし

林　葵丘

昭和二十三年末、シベリヤから復員して間もなくつれて行かれた句会で、先輩幽谷さんから「私が句を始めるとき足守の宗匠から頂いた雅号だが使っていないので」と、譲られたのが「葵丘(ききゅう)」　祖母が村雲尼公様から賜わった、三ツ葉葵に菊紋の箱が唯一つ戦災を免かれていたこともあって、葵という字に何か因縁めいたものを感じて、有難くいただき以来川柳に、俳句に、また絵にと、すべてに雅号として使っていますが、葵を「き」と読む人は少なく、一時葵邱と改めたとき、正しく葵(き)と読まれたのはよいのですが「きじるしさん」　早々にもとの葵丘に戻り、むつかしい雅号だなあと言われながら今日に至っています。

愛染帖

橘高薫風選

ワクチンが無い日本の平和病
世界一という淋しさの独りなり
青森市　工藤　甲吉

落椿免罪の如拾いおり
実在の時より多く君といて
八尾市　渡辺　章

楽天家の言う通りだと思うなり
なにもかもきのうで庭を丸く掃く
大阪市　小出　智子

そのくせに手紙となれば気をつかい
川西市　戸田　古方

あほらしうなってただただマイペース
神戸市　来住タカ子

草萌えて石仏少し笑み給う
俳せな人ばかり来る動物園
大阪市　江城　修史

酒のめぬ男が木枯し聞いている
残り火が炎とならぬ夜の底
枚方市　宮川　珠笑

栄転を見送ったあと残業す
グイ飲みを並べ酌き比べて独り
鳥取市　河村　日満

六甲の会三人娘に
振袖が似合うていたに還暦か

中流の意識もなくて老い呆ける
倉敷市　田垣　方大

古傷にやんわり触れる妻の酌
冷凍魚もどす女の無表情
富田林市　岩田　美代

誤解したままの葉書が黄ばんでる
悟れない影長くなり短かくなり
神戸市　宇佐美和子

おんな女サクラが散ってゆくように
相擁の背に刻々と時がある
東京都　山根　白星

ゴールもう見えるめめしく生きたもの
名人の世襲を嗤う胸のうち
大阪市　川口　弘生

愛すべく愛さるるべく女かな
ハイヒール女鋭き武器をもつ
今治市　越智　一水

流れにはさからわないが屑でない
足袋の裏冷めたくなった待ちぼうけ
兵庫県　辻　文平

地球儀を廻して男嘘を云う
悲しみを隠してるらし靴の紐
鳥取県　清水　一保

戦争と平和時々手をつなぎ
八尾市　高杉　千歩

いちにちを無銭で豊かだと思う
兵庫県　遠山　可住

足よわな女のように春が来る
京都市　松川　杜的

啓蟄のことから社説書き始め
寝屋川市　高田てまり

空想の世界で私独裁者
新宮市　大矢　十郎

洗うても足袋洗わんでも帽子
松山市　谷　真風

黒白をぼかし大人のつもりかな
名古屋市　越村　枯梢

俺に似た寒蠅一匹目の中に
鳥取市　中森葉士人

マネキンも二月の値札ぶらさげる
和歌山市　浦野　和子

気まぐれな風が運んで来たエッセー
和歌山市　松原　寿子

再会の海の青さへ青が増す
浜田市　佐々木　裕

寒雀親子の情を見せつける
大阪市　白石　潔

ああ自由満腹までは保証なく
今治市　月原　宵明

女の性哀れ二つの隆起もつ
大阪市　西森　花村

転職は考えません仁王さん
富田林市　中村　優

僕が割れた悲しい影法師
和歌山市　西山　幸

値札貼り替えられていた夢の跡
八尾市　高橋　夕花

春近し雄しべ雌しべが光りだす
大阪市　河野　君子

定退のゆらゆらと燃える影
米子市　八木　千代

人恋いの鈴鳴りやまぬ雪の道

八尾市　田中紀美代
叱られて母のつくった出口出る
岡山県　白石　文衛
甲羅干してる勤務時間というに
倉吉市　野中　御前
限られた命見すえる聴診器
唐津市　新岡回天子
銀髪の講話素直にテレビみる
米子市　小西　雄々
とりまきの意見に迷う民主主義
平田市　久家代仕男
落椿罪の深さを知って居た
島根県　小砂　白汀
絵にならぬ鬼の面ぬげ衣裳脱げ
唐津市　桧垣　岩光
かもめ一羽日本の恥部の浜に翔ぶ
羽曳野市　麻野　秋畝
グリーン車もジェットも居眠るだけの旅
熊野市　坪田　冬花
父の忌に咳一つ見つからぬ寺
松江市　黒目　大鳥
切札を間一髪の使い分け
唐津市　田中　紫浪
権力を憎み闘士のままで終え
唐津市　浜本　義美
新調の毛皮着ぬ間に水温む
島根県　木村はじめ
出稼ぎの父親帰る春の汽車
京都市　都倉　求芽
中天にかかって月が引き締まり
羽島市　伊藤　静枝

定退のコーヒー店主やや呆けて
室戸市　石建よしみ
馬酔木の花かげより万葉人の声
和歌山市　若宮　武雄
沈丁花その体臭は処女でない
島根県　榊原　秀子
けだるさをふと呼びさます沈丁花
堺　市　伏見　茂美
早春の使者が匂うよ沈丁花
寝屋川市　宮尾あいき
み仏おわす山ふところの暖かさ
岡山市　川端　柳子
裏町に今日を限りの椿咲く
藤井寺市　児島与呂志
嘘知っているから笑えない話
岡山県　二宗　吟平
のど仏見せて詩吟の壇に立ち
寝屋川市　小林鯛牙子
踊り子を娶りし人とおでん酒
橋本市　森脇　善太
栞を挟むと電車降りる女
竹原市　岩本　寛子
泣きやんだ女計算高くなる
竹原市　古田　鈍舟
愛かれてコダマかえさぬ枯木立
岡山市　串田句眛地
失意の日星が流れるふる里へ
倉敷市　斎藤　通風
五百羅漢俺には似ない奴ばかり
竹原市　三宅　不朽
古墳出る神代へつづく霧の中

大阪市　藤田頂留子
ネジ一つどこか足りない世の仕組み
島根県　角　耕草
出稼ぎが戻って来るよ桑を解く
倉敷市　中島　彩平
旅がえり軽い茶漬の味確か
今治市　矢野　佳雲
頭文字並べてレモン色の恋
唐津市　浜本久仁於
句帖ひとつのこされたる儘七七忌
唐津市　桑原　掬治
才女より美人入社にパスをする
岡山県　浜野　奇童
許す気になって歩巾をとり戻し
倉敷市　水粉　千翁
はにかみのことさら嘘がかくせない
倉敷市　藤井　春日
生活の疲れか笑い忘れてる
尼崎市　黒川　紫香
まっすぐな道があるから飛車を打つ
堺　市　高橋千万子
鵜呑みした話消化に時がいる
鳥取県　鈴木村颯子
振り向いてかまきり腹を立てている
愛知県　池田香珠夫
天は地に人に暖かさをくれる
名古屋市　大林曲ん手
持参金錆びたナイフは錆びたまま
八尾市　宮西　弥生
復帰する杖は他人を寄せつけず
大阪市　藤森小雅子

向う膝抱いて野心のない男
岡山市　井上柳五郎

山茶花の白風花を迎え入れ
和歌山市　津田　与史

放っとけば曲って咲いた鉢の桃
和歌山市　福本　英子

活字からはみ出している独り者
寝屋川市　柴田恵美子

野崎さん東海林の唄も遠くなり
岡山市　花田たけ志

諸行無常粘りも淡く淡くなり
兵庫県　中田　白李

灯明が揺れて読経が高くなる
兵庫県　野々口ゆう也

気がつくと悪魔の笛に踊ってた
倉吉市　奥谷　弘朗

ゆっくりと愛の奇蹟を待つとする
尾鷲市　渡辺伊津志

人間の真似して猫が背伸びする
寝屋川市　江口　度

朝の戦終ると猫もあくびする
呉　市　山根喜代美

定年の父は肩から昏れて老い
山口県　高崎　雀声

春の雲池の端から端に逃げ
島根県　西村　早苗

朗報にふれまい淋しい友が居る
唐津市　田口　虹汀

献立もすぐに話の合う二人
大阪市　神谷凡九郎

自転する地球と重心のない人と
京都市　山本規不風

芋の皮うまいと思う日の焦り
出雲市　吉岡きみえ

横むいたおんなに涙こぼれそう
鳥取県　但見石花菜

戻せない時を蝕ばむデジタル時計
島根県　飯塚　虎秋

おろおろと余生光陰矢の如し
貝塚市　行天　千代

ひさびさの観劇肩こり目はかすむ
宝塚市　吉田　笑女

駅の灯へほっと夜行の旅半ば
旭川市　朝倉　大柏

全襲になれば波紋が美しい
出雲市　園山　栄

これからと思う男が負けた酒
大和郡山市　森田カズエ

ライターは借ることにして朝を出る
米子市　石垣　花子

初恋を育てて銀婚式むかえ
東子市　小山　悠泉

紐つきのままの紅茶を客へ出し
東大阪市　竹中　綾女

そのうちにお傍へ行きますと墓へ言い
大阪市　小谷　清女

ゆっくりと当てのはずれた帰り道
西宮市　朝山千世子

絶筆の亡師の短冊に胸つまる
唐津市　岩崎　実

それとなく眺めていたき人に逢う
鳥取県　石井　雅水

ハンサムと娘らがからかう戦斗帽
兵庫県　川井　白峯

病床に伏して静かに明日を練る
青森県　五十嵐操史

飲みっぷり達者老いもまた楽し
大阪市　欄　蘭

誕生日つい忘れがち貧乏性
倉吉市　田民　碧水

初笑いお目目が見えぬ顔となり
米子市　佐伯　越子

裏作も植えて出稼ぎ里を出る
高知県　山下　登

幟ただはためくだけで留守の家
岡山県　岩道　博友

土産屋で口論してから嫌な旅
七尾市　松高　秀峰

発表を見に行く程の自信の子
出雲市　高橋可保留

披露したかくし芸から顔が売れ
岸和田市　清野　こう

雪をはく背に小止みなく積る雪
姫路市　藤後　実男

自殺してはじめて知った友の意志
島根県　山本　博也

拾われたばかりに遠い旅の石
松江市　竹内　寿美

春の雪いのちわが掌に消える迄
広島市　光井　みほ

決意する女邪心の多すぎて
大東市　土岐トク子

政談になれば冷えます白けます

新緑

大峠可動選

新緑に触れるとロマン生れそう　としよ
ちっぽけな嘘新緑がまぶしいな　早苗
新緑に胴上げされる天主閣　登美也
草笛を吹く新緑の村となる　文平
新緑の茶畑にあるロマン掘る　多賀子
造成の山新緑の夢をみる　寿美
冬に耐え新緑燃える春陽ざし　栄
新緑の中へ病後の杖を引き　七面山
新緑をカンバスにしている都会　雀声
新緑へ明り障子が染まりそう　素身郎
我が家にもこんな緑があった春　どんなく
新緑の候とペン先よい滑り　カズエ
蕗の薹これも新緑ですやろな　古方
新緑へ青虫警戒心を解き　佳雲
新緑の色恍惚の眼の中に　枯楢
制服を新緑重たいものにする　方大
新緑の土手をゆっくり試歩の杖　みどり
新緑の芽を皆刈って専門家　不二
新緑へプレスのきいた服で出る　岩光
新緑が身に沁む出社の朝となり　回天子
残雪の重みに堪えて菜の緑　久仁於
新緑に染まり新緑描きあげ　実
新緑に静かなとこがない嵯峨野　重人
カッターの白新緑に染まりそう　里風
若草に寝てそよ風の唄を聞く　〆女
新緑の中で恋する虫もいる　隆子
新緑がアルバムにある寝たっきり　道子
絵心は無いが新緑眼に残し　無人
新緑の山に溢れる茶摘唄　善四郎
新緑の峯から小さく見える家　ろ亭
次々に新緑見せる観光社　伊津志
新緑にみとれ絵筆をしばし置き　越子
新緑の茶室にお湯のたぎる音　青丹子
リハビリの汗新緑の陽を弾く　茶人
新緑が馨り茶摘みの鋏鳴る　優
盆栽の新緑無我の境にさせ　翁童
新緑を添えて売り出すマイホーム　保夫
新緑をぬうて遍路の鈴のぼる　虎秋
新緑の大山ぶなの香がこぼれ　弘朗
新緑の風が炎えてる朱の袴　大柏
陽をはじく海に新緑揺れている　一路
新緑を鉢に移して2DK　博友
新緑の濃淡招く山男　綾女
新緑の晴れ間を鯉の吹き流し　代仕男
新緑と題し構図の大胆さ　春日
新緑の梢は風を迎え撃つ　規不風
新緑の山借景に塔映える　綾女
新緑に染まり新緑描きあげ　実
新緑に静かなとこがない嵯峨野　重人
新緑をくぐって風にある希望　凡九郎
新緑をうつして静寂ダムねむる　軒太楼
新緑の吐息は彩をもっている　地軸
　天

男の子

保西岳詩選

男の子生れましたと電話口　越子
父ちゃんと今夜は寝たい男の子　岩光
東大の夢も託して男の子　小雅子
三人目やっと願いの鯉のぼり　虎秋
ままごとできたえられてる男の子　カズエ
父の目におとなし過ぎる男の子　一路
婆さんのもう手におえぬ男の子　代仕男
男の子おとなし過ぎて案じられ　登美也
鯉幟り立てて男の子が主役　優
どうしてでも一人欲しい男の子　勝美
男の子そこのけそこのけ泥だらけ　敏
仕草まで父に似て来た男の子　春日
丙午男の子でほっとする　ますえ
親の夢だんだんふくらむ男の子　ふみ

俺と言う言葉が似合う男の子　博友
体臭がパパに似て来た男の子　どんたく
少々のことでは泣かぬ男の子　小雅子
肩もんでくれる力は男の子　白李
男の子電報のような電話かけろ　亭
男の子部屋は丸るく掃いたまま　茶人
男の子と云われて注射泣けもせず　里風
北風へもう逆らっている男の子　勝美
重い荷を背負ってトボトボ男の子　七面山
向う脛生傷　絶えぬ男の子　本蔭棒
男の子翼が欲しい空の青〆女
男の子父と反する磁石持つ　佳雲
もう父を敵に見ている男の子　文平
男の子素足で走る夢を見る　一路
男の子ある日バイトの汗をふく〆女
男の子ちょっと気になる有事論　重人
泣きながら石を摑んだ男の子　近郊
佳

吟題課

棚きいた浴衣をきらう男の子　文平
親の敷くレールに乗らぬ男の子　栄
生傷の絶えること無き男の子　春日
いつの間にか母を見下す男の子　素身郎
俺に似る仕種が恐い男の子　小雅子
人
男の子だから再婚考えず　道子
地
反抗期破裂しそうな男の子　佳雲
天

骨つぼを抱くと男の子は泣かぬ　耕草
軸
くちびるを噛んで男の子は耐える

飾る

島居百酒選

とつがせてかざる物ないひな節句　きくみ
藁飾りつけて民話の鬼踊る　大柏
着飾って五十路の母の同窓会　みどり
年頃の娘を着飾らせ母は足る　綾女
着飾った手前素うどんではすまず　文平
美しく飾って哀しい無理心中　胡頽子
着飾ればいっそ哀れな精薄者　代仕男
思い出をほのかに飾るコケシ棚　登美也
床の間に三猿夫婦の風まろし　小雅子
着飾った母のアルバム若く生き　勝一
手洗いの飾りに一輪造花いけ　掬治
詩にして今日を飾った日記帳　里風
見せつけの魂胆と見た飾り棚　耕草
飾りにもなろうと美人新採用　枯楢
宝石で飾ると標準語に変り　刀水
ウインドに飾れば映える手内職　方大
着飾った虚栄へどしゃぶり吹きつける　静泉
税務署へ一つもいらぬ装身具　暁明
指輪一つ飾らぬ娘で父守る　恵美子
飾らない地方訛りに救われる　宵明
飾り気のない娘がスンナリ嫁に行き　喜代子
飾り気がなくて鏡に遠い妻　虎秋
もう飾る必要のない背広脱ぐ　佳雲
着飾れば三面鏡が満ちてくる　重人
寡婦地味に飾り残り火温める　軒太楼
だんじりの飾りへ老父の知恵を借り　七面山
はやばやと雛を飾りに実家の母　カズエ
退き際を飾る男の太い眉　春日
どん底で飾る心はまだ残り　勝美
故郷へ飾る錦がまだ織れず　本蔭棒
飾られた言葉で左遷を送る会　亭
飾るほどメッキが剝げるとも知らず　弘朗
佳
待望の五月を飾る孫が出来　としよ
飾らない言葉で触れる親の情　喜洸
イミテーションで飾って女灯を泳ぐ　どんたく
歴代の兜飾ればしゃべりだし　越子
不言実行父は身なりを飾らない　規不風
人
行跡で飾ればそれでよし男　古方
地
普段着で遇うて心も飾らない　善四郎
天
何飾る父には拳の愛がある　茶人
軸
飾らない一言痛いが温かい

初歩教室

題 —ロマンス—

本田恵二朗

読売ジャイアンツは読売新聞社のものであると同時にファンのものであり、阪神タイガースも同様である。

ヒット曲は歌手のものであり同時にファンのものである。つまり共有のものである。共有のものになり得なかったものは、はかなく消え去る運命にあり、共有になり得たものは両者の心に幾久しく住みつき、生き続けるであろう。

文芸も同様に、作家のものであり、その感動が読者の心に伝って、読者のものとなり、遂に共有のものとなる。共有になった文芸は生き続ける。殊に短文芸の場合はそれが一層に濃厚である。読者の心を動かし、その心に生き続けるほどの句を生みたいものである。作者だけが感動して、読者には何の感動も提供し得ない句は、いずれ忘れ去られる運命にあることを作家は心しなければならぬと思う。

ロマンスを抱いて茨の道歩む　美也
ロマンスグレー定年以後はもてもせず　同
（ロマンスグレー定年過ぎたら見向かれず）
老妻とロマンス偲ぶ雛の夜　同
（雛の宵褪せたロマンス偲び合い）
（色あせたロマンス偲ぶ雛の宵）
自問自答解けない謎にあるロマン　栄
愛悲し飾る心にあるロマン　同
（ロマンかなし心を飾り合うている）
賽銭に托すロマンス池鏡　可保留
（ロマンスの悲願を込めるお賽銭）
品のよいロマンスグレーに出るジョーク　小雅子
（ロマンスグレーの舌さわやかにジョークとぶ）
春おぼろロマンスシートに恋もえる　同
老人天国冥土旅行は無料　三十四
（老いらくのロマン冥土の旅想う）
母替りロマンスもなく青春を過ぎ　瓢太
ロマンスもハプニングもなく成田着　同
大空に牽牛織女の大ロマン　同
もう忘れたよとロマンス子にとぼけ　刀水
ハイミスへロマンスの話題遠慮する　同
今だから見せるロマンの青春記　善四郎
ロマンスグレーお金がもてて惚れられず　同
（ロマンスグレーもてているのは銭の方）
髪染めてまだロマンスの夢を追う　無人
ぐい呑みにそっとロマンス酌いて乾す　同
ロマンスも無くて明治の老夫婦　保夫
（ロマンスも知らず明治は遠くなり）

ロマンスをだいじに秘めて来た銀婚　同
ロマンスを背負うて仲良く船出する　由夫
雷光よりロマンの香りお着きです　同
（雷光がロマンの香りもって来る）
（雷光へロマンスの影ふとあわて）
孫の守しながらロマンス咲かせ合い　佐代子
ロマンスの芽ばえか猫ら屋根叩く　同
（ロマンスの音けたたまし屋根の猫）
（屋上の猫のロマンス狂気めき）
枯れたロマンス有っていい　頼次
（枯れきったロマンスだってあるよ君）
ロマンスを織り込んで顔の皺　同
（ロマンスを顔の小皺に織り込んで）
（ロマンスは若者だけのものじゃない）
ロマンスを綴る日記の誤字当字　慶彦
もてもせぬくせにロマンを追いたがり　同
（もてぬのがやたらロマンを追いたがり）
老いらくのロマンス灯す趣味の会　胡頽子
（趣味の会で老いらくのロマン拾い当て）
ロマンスのネガ褪せぬまま胸に住む　御前
老妻にロマンス語れど妬きもせず　同
ロマンスを胸の小箱に秘めて嫁き　同
伝説のロマン悲しき比翼塚　利美
（比翼塚のロマンかなしく語り継ぎ）
中年の恋にロマンスなど要らず　同
ロマンスが飯の種ですペンネーム　同
ロマンスのヒロイン訪えば世捨人　同
ロマンスへ遠い男で仕事の虫　柳五郎

（ロマンスに縁なく仕事の虫である）
繕ったロマンスで自己陶酔し　同
（継ぎはぎのロマンを温めあう陶酔）
ロマンスの火付け役だけまわる人　同
（ロマンスの火付役なら引受ける）
ロマンスもなく定年へひた走る　三男
ロマンスもなく鴛鴦でいる二人　同
（ロマンスも知らず鴛鴦むつまじい）
ロマンスが山ほどあって別居中　同
（ロマンスがあり過ぎ目下別居中）
春宵のベンチがロマンス聞いている　英子
ロマンスに尾鰭をつけて週刊誌　同
（ロマンスに尾つけ鰭つけ週刊誌）
湯上りの襟にロマンス匂い出し　同
（湯上りの襟にロマンス匂わせる）
空想のロマンを綴る夜の汽車　露杖
（空想のロマンを夜汽車の窓に描く）
色あせたロマンス覗く古行李　同
（古行李の中でロマンス縋せている）
ロマン追う宇宙現し世流れ星　同
（流れ星のようにロマンス消え失せる）
ロマンスの画像が眩しい齢になり　句味地
ロマンス混ぜて満座の花咲かせ　同
（ロマンスを小出しに混ぜて座を湧かす）
ロマンスの思い出具に托し嫁く　紀久子
スキャンダルとロマンスが好き週刊誌　同
日記には秘めたロマンス書かずおく　同
（ロマンスは暗号で書く日記帖）
洋間にはロマンスシートでんと据え　三和
（ロマンスシート据えて洋間へ春を呼び）
マネキンにロマンスなどはないらしい　同
（ロマンスがマネキン人形に見つめられ）
ロマンスの花が咲いたが実がならず　湯川頼次
過ぎ去ったロマンスなんか振り向かず　同
ロマンスに炎えてる女の目がきれい　静佳
ロマンスの夢から覚めて米洗う　同
賑やかなロマンス残して出る校門　同
賑やかなロマンス派手な離婚劇　同
ロマンスをかぎつけ雑誌記者走る　敬三
ロマンスを秘めて老父母達者です　同
ロマンスグレー父は鏡台はなれない　同
ロマンスの出会いを聞いて少し妬き　美智子
万葉のロマン見直す万侶の墓
（万侶塚に万葉のロマンかいま見る）　同
花と蝶甘いロマンをぬくめ合う　同
（花と蝶の口づけ甘いロマン生む）
風化したロマンスが棲む古日記　同
（古日記の隅でロマンス風化する）
色褪せたロマンスときにあたためる　同
（或る夜ふと褪せたロマンスあたためる）
ロマンスの中で散る恋実る恋　寿子
空間を埋めるロマンスだってある　同
ロマンスの噂へつぼみほころびぬ　同
ロマンスの彼方に虹の橋がある　同

題―入陽―5月20日締切（七月号発表）

宛先　〒711　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

★ 第2回鳥取県川柳大会

日時　6月24日（日）午前10時から
会場　米子市皆生一七八五**皆生温泉会館**
柳話　柴田午朗氏
兼題　「夫婦」　河村日満選
「花束」　尼緑之助選
「予想」　浜野奇童選
「チャンス」　沢車楽選
「口実」　奥谷弘朗選
「折る」　小林由多香選
「ライバル」　小西雄々選
席題　三題・各題二句以内
会費　千円。投句五百円―6月15日締切
投句先　米子市角盤町二―三　沢車楽
（宿泊・一泊二食六千円―6月10日までに

句せんに便せんに

川柳塔柳箋

一冊百五十円　送料二百円

第三百三十四回（五十四年度第四回）

大萬川柳「ゆとり」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　四百十一句

入選　七十五句

敵方の票も読んでいるゆとり　桜井　雀踊子

ゆとりが出来てあちこち痛み出し　堺　邦晴

ゆとりある暮しと見せる妻の知恵　倉敷　春日

ささやかなへそくり妻にあるゆとり　呉　英詩

ちっぽけなゆとり募金に名をつらね　和泉　東天紅

ノルマもう越したゆとりの棒グラフ　今治　佳雲

明日は明日の風が吹くさというゆとり　岡山　句昧地

一鉢にゆとりみつけて老の春　大阪　勝美

大の字に寝ころぶゆとり欲しい家　鳥取　伊都

あきらめたゆとりへ沈丁花匂い　寝屋川　恵美子

勤行を終えて尼僧の文机　寝屋川　あいき

ふるさとへゆとりをみせに着る錦　桜井　雀踊子

年金でくらし心のゆとりだけは持ち　堺　邦晴

ゆとりある暮しを母は見て帰り　藤井寺　吸江

二番目にピッタリつけているゆとり　兵庫　可住

ふり返るゆとりの出来た掌を合せ　堺　天笑

傷心の社長部下にはゆとり見せ　和歌山　としよ

嫁が来て夫婦で旅に出るプラン　倉敷　筒子

切り札を胸にたたんでいるゆとり　岡山　千代香

桜餅懐紙へのせる日のゆとり　和歌山　英子

露地裏の軒に季節の花の鉢　堺　ミツエ

勤行を終えて尼僧の文机　名古屋　枯楠

ゆとりある人は入れない社会鍋　東大阪　綾女

ゆとりある暮しに見られた寄附の額　大阪　道子

赤信号ゆっくり待っているゆとり　和歌山　与史

子供みなかたづけゆとりにある空虚　堺　千万子

土曜日のゆとりが夫婦の語が軽い　八尾　夕花

腹芸ですます社長にあるゆとり　鳥取　弘朗

ゆとりある暮しと他人だけ思い　大阪　文秋

ゆとり求める生活ローン追いかける　出雲　健太郎

ゆとりある心に春の音がする　富田林　花楠

ゆとり持つ心が明日の虹を呼ぶ　和歌山　頼次

ゆとりなどありませんけど立ち話　島根　三和

勝算があって出方を待つゆとり　西宮　百酒

資金繰りついたゆとりの屋台酒　尼崎　利美

ややゆとり出来たか笑いに巾ができ　大田　軒太楼

逆らわず流れにのってみるゆとり　出雲　栄

勤行を終えて尼僧の文机　富田林　優

流派などいらぬゆとりの花の壺　東大阪　綾女

ゆとりなどないがもしもへ貯える　東予　悠泉

ささやかなゆとり日曜日のごろ寝　倉敷　素身郎

銀行へゆとりを見せる表が出来　橋本　木魚

老の肩服のゆとりもさびしすぎ　八尾　美幸

末っ子の卒業やっとすむゆとり　米子　美世

ゆとりある心に女神住んでいる　大阪　炉斎

欲も捨て見栄も捨てたら気のゆとり　西宮　喜代子

ゆとりなどないが拝まれたら弱い　大阪　頂留子

血の通う貴方の愛にあるゆとり　和歌山　寿子

ゆとりある老後へ今日も流す汗　東大阪　美子

帳簿では出来たゆとりが見当らず　箕面　一本杉

抱きとってくれる故郷のあるゆとり　西宮　喜代子

これしきのゆとりを妻のいとしさよ　大阪　真砂

泣きに来て母のゆとりに救われる　和歌山　武雄

ゆとりない暮しにもある春の彩

勝負の日ゆとりを持っている捨て身
やりくりがゆとりつくった日の歓喜
和歌山　三　男

ゆとりには遠く年金にしがみつき
臨月を神に委ねた娘のゆとり
大阪　きくみ

ゆとりある友の心に温められ
信じてる心のゆとりに愛が棲む
大阪　ふ　み

細腕も職持つ女にあるゆとり
それぞれのゆとりを見せる同窓会
出雲　可保留

あのゆとり欲しいと思う池の鯉
ひとときのゆとり求めて来た法話
古稀迎えゆとりをみせる夫婦旅
佳　句
和歌山　紀久子

まだ開くゆとり残した花きれい
箕面　一本杉

ゆとりとは関わりのない腹が出る
和歌山　勇　太

ゆとりある暮しも流す今日の汗
唐津　虹　汀

滝となる水も河鹿と住むゆとり
八尾　夕　花

愛されてると知った日からもつゆとり
西宮　百　酒

巣立たせてからも母にはないゆとり
宝塚　紅　扇

ゆとりなどなかった母の形身分け
人の句
米子　千　代

許そうと決めて歩巾が広くなり
地の句
堺　一二三

ささやかなゆとりエプロン買い替える
天の句
大阪　柳　志

足るを知る2DKを広く住み
選者吟

ゆとりない振りして支払い又延ばし

昭和五十四年度ベストテン（三月現在）

一	**優**	一〇、五	富田林
二	**百酒**	九、五	西宮
三	**美幸**	七、五	八尾
四	**寿子**	七、五	和歌山
五	**千代**	七、〇	米子
六	**花梢**	六、〇	富田林
七	**真砂**	六、〇	大阪
八	**三男**	四、五	和歌山
九	**文秋**	四、五	大阪
一〇	**邦晴**	四、五	堺
一一	柳志	四、〇	大阪
一二	頼次	四、〇	和歌山
一三	武雄	四、〇	和歌山
一四	道子	四、〇	大阪
一五	枯梢	四、〇	名古屋
一六	美子	四、〇	東大阪
一七	吸江	四、〇	藤井寺
一八	佳雲	四、〇	今治
一九	小雅子	四、〇	大阪
二〇	曲ん手	四、〇	名古屋
二一	一二三	四、〇	堺

以下略

川柳塔社常任理事会（4月5日）

久しぶりの若本多久志氏のご出席である。会計報告ともなれば、そうもニコニコしておれず、つい室内の空気がこわばってしまう。

多久志氏の「続・老いの坂」刊行（金婚・喜寿）記念と「路郎忌」が七月六日（金）午後六時から〝金属会館〟で開催されるが、番傘川柳本社から選者が来てくださる―「水府忌」には川柳塔社から選者として西尾栞氏が出席することになった。

故北川春巣氏の遺品の書籍類を西尾栞氏が保管することにきまる。故白柳氏の遺品の一部と川柳塔誌の一部は河内天笑氏にお預り願っている。

本年度の二賞発表と同人総会は、上本町六丁目の「なにわ会館」と決定（十月七日）

近づく第三回全日本川柳大会の委員長である生々庵主幹から、同人諸氏のご協力願うというご挨拶があった。―出席―多久志・水客・紫香・潮花・栞・百酒・薫風・生々庵・与呂志・好郎・萬的・岳人・一三夫諸氏

昭和五十四年度第六回

「階　段」　三句以内
締切　五月二十日

第七回

「捨　身」　三句以内
締切　六月二十日

投句先
〒593　堺市堀上緑町一ノ三ノ七
藤井一二三方
大萬川柳係

NHK川柳募集

課　題　「五　月」　**川村好郎選**
ハガキに三句以内　**締切　五月十日**

投句先
〒540　大阪市東区馬場町
NHK近畿本部「老後をたのしく」係

発　表
五月二十六日（土）午前九時十五分
ラジオ第一放送（全国放送）
「老後をたのしく」の時間

柳界展望

原稿締切毎月末）

▼中島生々庵主幹は近づく第三回全日本川柳大会の成功を期し健康管理にも留意されている。―中島小石女史は直原玉青先生の青玲社画展で特選の栄与にかがやかれた。

▼七月六日の路郎忌に番傘川柳本社から金泉萬楽氏が選者としてご出席いただき八月の水府忌には本社から西尾栞氏が選者として出席。こうした両社の交流はこんごも友好的につづけられるであろう。

▼伊藤入仙氏（川柳京かがみ）の川柳句碑が伏見桃山の善光寺に建立される。その記念句会が五月二七日に同寺で開催。詳細は京都市東山区繩手通新橋上ル・川柳京かがみの会へ。

▼大井正夫氏（姫路市）はすっかりお元気になられたようで、そのご筆跡も往時に近いように感じられる。

▼川柳「路」五三年度賞最高賞は、「核ボタン句碑はツルリと石になる―村田江子」準賞は「生きる証しへトイレットペーパー長い―柏葉みのる」と決定。なお同誌では第9回誌上全国川柳大会の句を募集中。

▼東野大八氏（岐阜県）から好評読み物の「川柳太平記」の原稿を向う二年間ほども編集部へ送っていただいている。編集部としてはこれほどありがたいことはない。

▼山村祐氏（東京都）から―「川柳太平記」の東野大八氏の博識には頭がさがります。

▼川柳研究社年度賞表彰第七回川柳大会は五月二十日（日）正午から東京都中央区新富町一―一六―八日本印刷会館で開催。第二部は投句者（各三句）題―抵抗・里・骨・深い・親子・過ぎる―投句料五百円―締切四月末日―〒一一三東京都文京区根津一―五―一二吉岡宵波宛。

▼噴煙川柳大会は五月二七日午前十時開場。会場は熊本市桜町・市民会館大会議室―題―あれから・一本・乱れる・追伸・ほどほど・（各三句）投句五百円（切手可）締切五月十五日〒862熊本市京塚本町五三―十二、七谷方川柳噴煙吟社大会係。

▼田口麦彦著「群羊」が川柳噴煙吟社から発行された―川柳でつづる昭和後期とあるが、正に昭和後期の生きてる歴史である。故路郎先生は早くから麦彦川柳を高く評価されていた。序文で吉岡竜城氏は、噴煙吟社の看板は麦彦君である、と。句も印刷も洗練された好著。定価二千円。発行所〒862熊本市京塚本町五三―一二　川柳噴煙吟社（郵便振替熊本四七八五）

▼第一七回東広島市かも川柳大会は五月十三日午前九時から東広島市中央公民館で開催。兼題―彩・目次・鼓動・仮縫・軍配・感触・掟・闇・私語・風車。特別課題「指切り」高橋鬼焼選・会費千円。投句料五百円（締切五月十日）〒724東広島市西条町寺家五八〇八　高橋鬼焼。

▼北村白眼子氏（函館市）は3月2日心不全のため急逝、八十二歳。「川雑」時代には原稿もお願いした方である。―合掌。

▼北夢之助氏（新潟市）は2月16日に腸閉そくで逝去された。八十三歳のご高齢―合掌。

▽同人の動向△

▼長野文庫氏（今治市）は本社主催の〝新緑・四国の旅〟へ今治・松山方面の柳人へ呼びかけてくださっている。

▼小西無鬼氏と遠山可住氏（兵庫県）が四月三日来社。編集部の一三夫氏と〝ささやま〟句集発刊の相談をされた。

▼八木摩天郎氏（堺）から―読売テレビの深夜放送「明日の天候」の字幕に仁徳御陵の正門と私の句碑が放映されました。

▼児島与呂志氏（藤井寺市）から―〝地下鉄〟刊行記念

新同人紹介

辻（つじ）　文平（ぶんぺい）
―可住・無鬼・推薦

牛尾（うしお）　緑楼（ろくろう）

福本（ふくもと）　英子（えいこ）

中野　勇太（ゆうた）

坂口　公子（きみこ）

森脇　善彦（よしひこ）

浦野　和子

以上―太茂津・千寿子・武雄・与史・推薦

古野　ひで
―操子・武助・一三夫・推薦

句会に、三人の娘たちが記念品として短冊掛けを寄贈してくれました。ありがたいことです。

▼小出智子さんと河野君子さん（大阪市）のキモ入りで「勝山双葉川柳会」が誕生した。近所の奥さんたちを主体とした初心者ばかりというユニークな句会である。

▼小野克枝さん（倉敷市）に本号の〝秀句鑑賞〟をお願いしたが、ご夫君が腸閉そくでご入院中だった。ご無理申し上げました。一日も早いご退院を祈っています。

▼西田柳宏子氏（大阪市）は二十四年勤務された寺崎電気産業株式会社を定年後二年の嘱託勤務も無事終え円満退社された。―定年の未だまだ余生と思うてず―柳宏子。

▼玉置重人氏（大阪市）も大阪市交通局（東梅田駅勤務）を定年退職をされた。―矢印がここでちぎれた定年譜―重人。

▽旅　信△

▼黒川紫香氏・正本水客氏が沖縄石垣島八重山観光ホテルから―海碧く碧く星砂手に残る―紫香。日本最南西端の西表島に来ています―水客。

▼京都〝塔の会〟から寄せ書き拝受。

▽5月の句会△

▼**菜の花句会**は十日（木）夕六時から―西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾下車西南歩約五分―会費二百円―兼題「感じる―某選」「香り―酔々選」「乳―美幸選」「瓦―未定」―投句・郵券百円同封―投句先〒581八尾市高安町北一の二五大路美幸宛。

▼**堺川柳会**は十二日午後六時から摩天郎居で開催。題は―歩く・子供・離れる・陽気。

▼**南海川柳会**は十七日午後六時から―南海電鉄本社食堂内で開催―題は―駅ビル・気がかり・強気。

▼**南大阪川柳会**は二十一日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は―狸・ものしり・自立・アイデア。

▼**東大阪川柳同好会**は二十六日（土）午後六時から東大阪市中央公民館2F（近鉄永和駅南）で開催。題は―一流・骨董・点・こども。

▼西出一栄さんの遺句集をご夫君西出甚也氏から出版された。句集の百句は中川滋雀氏の麗筆が原版である。

本社　四月句会

会場　金属会館

六日　午後六時

四月選挙、春の選抜高校野球、花だよりのデート（約束）などにからまれてか、今月も七〇名を割った。来月は行楽シーズンだから句会部は頭が痛い。

柳話の川村好郎氏から四月句会の幕あきとなる。

お話は新年宴会の帰りに拾った個人タクシーの運転手さんが非常に礼儀を知る人だったので、思わず話題が豊富になり、運転手さんの身の上ばなしにまで発展した。

愛児の死、職業の失敗などから死まで考えたが、奥さんの力強い愛情にささえられ、今日では日々を感謝しながら生きていると、深夜料金もとらず、車をゆっくり走らせて客と運転手の意気投合を好郎氏らしい口調で語られた。―53年度の各地柳壇賞は好郎氏の手から竹中綾女さんに授与された。

月間賞は岩本雀踊子にかがやいた。

（受付・児島与呂志・塩満敏）

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―与呂志・柳宏子・紫香・水客・滋雀・太茂津・千万子・茂美・敏・一三夫・夕花・百酒・潮花・雅風・小路・萬的・柳志・俊子・吸江・あいき・恒明・柳伸・千代三・恭太・形水・頂留子・瓢太・恵美子・鬼遊・定男・喜風・みずほ・度・涼一・雀踊子・小松園・岳人・千寿子・酔々・智子・君子・ゆきを・生々庵・洋敏・寿子・規不風・トメ子・文秋・誓二・好郎・庸佑・春巳・古方・薫風・凡九郎・葉子

席題「勝負」　江口　度選

勝った勝ったと胸張りとなるそんな僕　古　方
美の勝負しずかに炎えている花展　夕　花
勝負師の夫へ小春の心意気　一三夫
捨身から勝負の勘が甦り　ゆきを
勝負する男の底は解るまい　太茂津
はぐれ鳥味方の居ない勝負する　紫　香
倦怠期勝負はつけぬことにする　千寿子
諸々の勝負は仏にのみこまれ　千寿子
解説の方が酔うてる名勝負　柳宏子
勝負には弱い男で金を溜め　潮　花
七人の敵へ勝負の朝のお茶　喜　風
勝負を言うなら円に入れられぬ　智　子
勝負する女が少し出す色気　雀踊子
軍鶏の血へ賭ける男の河内弁　滋　雀
勝負事好きでピンチが付きまとい　文　秋
勝ち負けは度外視青春という歩幅　水　客
球根と土の勝負の冬に耐え　生々庵
未熟さが勝負にこだわり残しとり　洋　敏
勝負師のあぐらに明日のない命　雀踊子
勝負師が邪険に払う肩の花　百　酒
矢弾尽き果てて勝負師永眠す　小松園
こんたんのある夜は妻に勝たしとく　小　路
勝負する男の野心には触れず　柳　伸
一泡を吹かすどころか尻尾巻く　恒　明
ひたむきな勝負祖父ゆずり父ゆずり　千万子
勝負師の意地がのぞいたちびた下駄　与呂志
勝負師へ馬ウインクをしてくれる　涼　一
眼の位置が動くと負けている勝負　千代三
勝負師の後姿が寂しすぎ　形　水
勝負師の指に光っている指輪　鬼　遊
だんだんと無我の境地に入る勝負　ゆきを
挑まれた勝負男に空がある　定　男
男対女で勝負はついている　智　子
地球わる勝負をいつかするだろう　度
煙突男へ警官首がだるくなる　涼　一

席題「煙突」　亀山　恭太　選

赤煉瓦の煙突もある明治村　萬的
煙突のけむりも細く焼芋屋　好郎
何造る煙突黄色い煙出す　形水
煙突が廃墟の月を眺めてる　紫香
煙突の煙り真直ぐ春うらら　与呂志
倒産をした煙突の無表情　千万子
石油危機煙突泣こうか笑おうか　君子
煙突が見えて棚から荷を降ろし　千代三
煙突の高さをビルが抜いていき　洋敏
風下になり煙突は憎まれる　恒明
取こわす予算へ煙突だけ残り　柳宏子
煙突の昔栄えた炭山の唄　滋雀
煙突の林立ここにも人が住み　瓢太
銭湯の煙突ならば咎めない　夕花
煙突が先住権を主張する　度
煙突が見える仁徳陵の位置　春巳
目標になる煙突の下に住み　智子
煙突の真下の長屋秋刀魚やく　雀踊子
人を焼く煙と知らぬクレヨン画　柳志
目印になる煙突で愛される　柳宏子
火葬場の煙突風になる命　雀踊子
煙突の影の下行く蟻の列　酔々
煙突が誇りであった街に生き　洋敏
ふる里も煙上らぬ朝となる　千万子
瓦焼く煙突瀬戸は春の汐　萬的
夕陽がのぞく煙突の郷里の風呂　小路
下請の煙突風にゆれている　雀踊子
煙突は消すまい労資掌を握り　喜風
コンビナートの煙突赤い舌を出す　綾女
景気よい煙突罪を負うて立ち　百酒
煙突はなくてもパパのサンタ来る　あいき
煙突の公害消えて町が餓え　一三夫
煙突の街革新のビラばかり　恭太

兼題「一年生」　宮尾あいき選

一年生の図画がピカソに見えてくる　優
着飾った母を急かせる一年生　英子
一年生ですと周囲へ気を使い　軒太楼
定退の一年生を妻きらう　夢酔
一年生僕だけ古いランドセル　枯楢
東大へ一歩踏み出すランドセル　柳志
一年生未来図いっぱいランドセル　生々庵
入学を百まで言えて待ちこがれ　恭太
一年生おたふく風邪をもらってくる　小路
一年生になれば姉さんらしくなり　瓢太
一年生の頃からボスの要素持つ　涼一
可能性秘めて一年生並ぶ　庸佑
女の子に泣かされてきた一年生　ゆきを
一年生母をまどわすことを言う　潮花
三浪がやっと射止めた一年生　みずほ
先生がしばらく恐い一年生　文秋
どの子にもママがきれいな一年生　柳志
アイウエオ書けて一年生になる誇り　百酒
母親を意識している一年生　与呂志
一年生一家総出で見送って　トメ子
一年生だけは帽子を着てくれる　薫風
社会人一年生であるファイト　恒明
おやじよりでっかい高校一年生　君子
もうボスになってるらしい一年生　恒明
一年生背伸びすることもう覚え　春巳
ハンカチの白さ可愛い一年生　与呂志
先生をもうなめている一年生　庸佑
ママに似た先生うれしい一年生　君子
一年生親にも子にも夢があり　洋敏
お地蔵さんにもご挨拶したい一年生　夕花

高橋操子著
川柳句集「千亀利」
千五百円・送料共
川柳新聞から—生への情熱が川柳作品に反映されて読むものに感動を与え、生きることの喜びを教えてくれる……
——借金があるから自殺など出来ず
——合掌をすれば十指の素直なり
発行所　川柳塔社

一年生母親がそわそわする四月　柳伸
窓ぎわの机が嬉し一年生　潮花
ランドセル家の中から春になる　千万子
一年生と思えぬおませなごあいさつ　あいき

兼題「立ち食い」　阿萬　萬的　選

立ち食いへ暮しの足をのぞかれる　刀水
立ち食いにブーツの女悪びれず　登美也
立ち食いの子連れがならぶ花の下　優蘭
どんな娘かそばの立食いハイヒール
立食いの屋台で大阪の味を知る　三十四
宮様も立ち食いなさる園遊会　ゆきを
立ち食いの背をたたかれて見たら妻　小路
たこ焼を食べ食べ歩く花の下　春巳
立ち食いのコウモリ傘の置きどころ　涼一
立ち食いで小さな不満消して来る　規不風
白い杖焼鳥の屋台へ寄る機嫌　水客
立ち食いのソバにしときと塾にやり　ゆきを
マクドナルドの近況立ち食い族が占め　瓢太
立ち食いのサザエも揺れるガード下　涼一
立ち食いの端にあぶれた赤い爪　小路
猫舌の立ち食い一台おくれさせ　綾女
立ち食いの足サンダルで蚊をはらい　文平
立ち食いのうどんは口で箸を割り　どんたく
立ち食いのポーズに足が短かすぎ　文平
終電に遅れて立ち食い連れになり　静馬
一と区切りずつ立ち食いの銭払い　小松園
立ち食いにかじかんだ方の手はポケツ　生々庵
時間通り立ち食い朝の顔並ぶ　与呂志
信州そばの立ち食い受けてるバスツアー　静馬
立ち食いにも慣れて大阪住み易い　あいき
立ち食いの焦りワサビが鼻に抜け　太茂津
立ち食いの間をぬうてくる猫背　水客
立ち食いも乙な味なり奥嵯峨野　酔々
立ち食いの荷物股間に近く置く　弥生
立ち食いの顔も撮られる時の人　百酒
立ち食いの片手は小鉢握りしめ　小松園
立ち食いにマナーはいらぬ新世界　一三夫
立ち食いの尻の大小縄暖簾　どんたく
立ち食いの裾から冷える出雲そば　萬的

兼題「花だより」　若柳　潮花　選

お見頃が長い車中の花だより　弥生
主治医まだ酒を許さぬ花便り　静馬
北国の雪へ南の花便り　軒太楼
花便り初月給の封を切る　涼一
花だより有給休暇組み替える　度
花便りわが社はまさに決算期　涼一
花便り比叡の山の雪消えず　度
花便り財布を締める交際費　滋雀
其処らまで来て足踏みの花便り　英子
鈴蘭が空から届く花便り　柳志
北風を追い追い花の便りくる　敏
花便り地図をピンクに染めて行く　文秋
過疎に住む母から山の花便り　みずほ
折込みで来たアルサロの花便り　柳志
建ち売りの環境絶佳花便り　太茂津
花だより電車増発して構え　庸佑
転勤の椅子が冷めたい花便り　寿子
花便り出張日程繰りかえる　形水
かぐわしく点字も匂う花便り　千代三
出不精の夫を責める花便り　恭太
盆梅の便り湖水のにぶい色　萬的
酒持って来いと言わぬが花便り　小松園
新館も出来たと誘う花便り　紫香
ゴミの山気になる役所花便り　ゆきを
花だよりそえて嫁いだ娘の無心　庸佑
花便りローカル線はいま盛り　ゆきを
花便り一人で行って見たくなる　形水

あなたの
川柳句集を！
お気軽にご相談ください。
印刷全般　藤原童心社
〒564 吹田市天道町6番15号
でんわ(06)三八八―二三七七番

満開を待てず三分で呑む手筈　三十四
潮騒が花の便りをのせてくる　水客
初孫が見たいと故郷の花だより　好郎
職探す新聞にある花便り　恭太
桜まだ蕾抱いてる花便り　潮花

兼題「区切り」　菊沢小松園　選

一区切りつけるに金を借り歩き　文平
定年で区切るスタートだってある　どんたく
どう見ても食いこまれてる区切り線　弘生
このへんで区切りつけたい腐れ縁　静馬
子が泣いたところで内職お茶にする　〆女
発車ベル別れに区切りつけて鳴り　刀水
貧しさに区切りがつかぬ足の裏　登美也
割り勘で区切りをつける長い恋　優
一区切りつけて世評の動きみる　軒太楼
一区切りつけて煙草にする居職　蘭
愛情を区切ると熱がさめてゆく　夢酔
句読点打って未来へ筆をとる　枯梢
分譲地豆腐のように区切られる　涼一
一本の筋は通してある区切り　恒明
手紙焼いて区切れぬ恋と知っている　智子
金魚もう区切られている泳ぎする　紫香
飲み出すと区切りがつかず目もすわり　ゆきを
中年のデート区切りを知っている　形水
区切られた海で魚が考える　鬼遊

ここからはビジネスだよと区切りつけ　文秋
一区切りした会場へ記者を入れ　柳志
一戸ずつ区切って田んぼ売りに出し　敏
年上の女ごころという区切り　一三夫
ひと区切りつけよと酒がせき立てる　吸江
ごぼん目の区切りに生きる京言葉　度
区切りしてみても所詮は流れ雲　生々庵
区切り良いとこで借金申し込み　洋敏
色恋の区切り女がつけに来る　潮花
ブロックで区切る大地は神のもの　鬼遊
居直って女区切りをつけさせず　紫香
もう看板ですとマダムは酔わぬ声　恭太
戦後派にむかしの区切りたずねられ　古方
うぬぼれと見栄が区切りの邪魔をする　好郎
借金に区切りつけるのに借りる　庸佑
御隣との区切りに白いバラ咲かす　あいき
病窓はすがすがしく区切りされ　生々庵
憎しみと愛の区切りは紙一重　涼一
おとなの恋とずるい別れを男する　水客
ひと区切りつけて無心を聞いてやり　春巳
証文を持って区切りをつけに行く　みずほ
きっぱりとつける区切りに酒が要る　一三夫
衝立てで区切って団体さんの昼　小路
区切をつけて生きかた考える　雀踊子
一と区切り因果含めて承知さす　小松園

（河井庸佑・整理）

川柳塔誌・兼・席題課題表

（一路集）
（創刊号～52年11月号）
（前回「チ」のつづき）聴診器・チラシ・珍客・沈黙・陳列。

「ツ」
追求・追伸・追善・通訳・杖・通行止め・使い捨て・摑む・机・土・妻・爪揚枝・罪・爪・摘む・艶。

「テ」
テープ・テーブル・手・手足・停電・体裁・貞操・手落ち・手がかり・出口・手ぐすね・テコ入れ・手ごころ・デザイン・弟子・出しゃばり・手相・手ぶら・手枕・デマ・デモ・寺・デラックス・点・天・天井・天気予報・天気図・転職・天罰・天高し。転勤・伝説・電話・電話帳・電算機・電気・電波。

「ト」
塔・投書・倒産・通せんぼ・灯籠・童話・童顔・動物園・同情・時・独身・独酌・独立・読書・毒舌・時計・年上・年玉・年寄り・土地・トップ・飛ぶ・とばける・土曜日・トラブル・トランプ・虎・トリック・鳥・取り巻き・泥・トンネル・どん底・鈍感・鈍行。

「ナ」
ナイフ・ナイター・長生き・長屋・流れる・泣き言・なさけ・ナツメロ・夏枯れ・夏バテ・夏祭り・ナプキン・名札・涙・波・慣れ・縄・難題。

「ニ」
にぎり・握りめし・肉眼・逃げる・逃げ場・（この項未完）

―樫谷寿馬

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳化粧櫓　植村客遊子報

妥協した男の顔は頼りなし　岳　詩
親切にしてやりたいが未亡人　秋　月
金脈へ女一人が踊らされ　実　男
カラオケも迷惑そうな酒になり　奮　水
生煮の鍋をつついて子沢山　越　山
梅の匂いにこころのしこり解けかかる　紅　月
忘れよう男じゃないか明日がある　葉　香
人類の進化鉛筆削れぬ子　永　楽
ブランデーじっと我慢の女と居る　客遊子

川柳ささやま　河原みのる報

親馬鹿が子の成績に拍子抜け　とよ子
国宝の歴史を語る日の平和　つや子
国宝を感心してから値ぶみする　深　月
野仏でよい国宝になれずとも　孝
どろんこの人間国宝喋り出し　ゆきお
国宝となった如来の目が光り　枝　葉
金網の奥で国宝孤独なり　幸　哉
泥棒も巡査も起きている夜道　可　住
運チャンが逆に強請らる夜道現世　みのる
それぞれに生霊のある夜道　ひか平
金策の成らず夜道の足重し　素　水
ほろ酔いの夜道で嘘を組み直す　ゆう也
水盗む女に夜道おどかされ　文　平
又聞きでよかった友よ強く生き　靖　子
また聞きでないアメリカで調べて来　越　山

菜の花句会　高杉鬼遊報

ガガーリンだけが写してきた緑　宇宙太
生活安定鼠を捕らぬ猫　恒　明
深呼吸急ぐ心を押えてる　勝　美
万緑も雑木林で終る山　喜　風
急がないようにゆるめの靴はかす　度
卵が立つ謎は面白いと思う　鎮　彦
太陽の真下で人間嘘をつき　雀踊子
飛行機の中でお走りなさったら　凡九郎
八尾よりは富田林にある緑　岳　人
拾われた日を忘れない膝の猫　小松園
野次馬の責任持たぬ顔ばかり　みずほ
常緑のなかにも散るもの芽吹くもの　幸　生
かたつむり恋にしあらば急ぐべし　鬼　遊
太陽の言葉に庭木背のびする　頂留子
念入りの化粧済ませてから急ぎ　柳　伸
太陽がのぼり一匹ほたる死ぬ　酔　々
猫の目を覗くと怨の字が揺れる　美　幸
急いでいるのに急げど急げど発車ベル　紀美代
責任があるから鞭を持っている　夕　花
玄関でユーモアの謎やっととけ　栞

川柳わかやま　津田与史報

苦労する度に絆が太くなり　勇　太
生きてゆく廻り舞台で一人舞う　光　代
胸に書く手紙は文字にしたくない　和　子
童心にかえるひとつの石を積む　白光子
童心へもうプライドが芽生えてる　としよ
童心へ母の命は星になる　雀踊子
父叱る人童心の目に射られ　十　郎
少年の遺書に童心消えている　善　太
鍵かけた心童心に開けられる　三　男
表札に母の苦労が書いてある　登紀夫
並大抵の苦労って何で計るのか　凡九郎
母一人苦労の顔を外に置き　頼　次
子育ての苦労は遠く日向ぼこ　紀美女
耐えている苦労へ親は手を貸さず　正　博
その話舞台が違うと逃げる腰　天　彦
舞台とは予想もつかぬ素顔もつ　柳宏子
観客の居ない舞台に一人居る　誠　一
安万侶の蔭で耐えてる石舞台　英　子
舞台裏で女が糸を引いている　千寿子
花道は無くてもある日去る舞台　緑　楼

いずも川柳会　板垣草丘報

追われてるように裏口から帰り　可保留
約束を今でも忘れない小指　芙佐子
エプロンを結んでくれた新世帯　功
結ぶ手のぬくみ只今恋愛中　祥　月
結ばれるドラマで鍋が煮こぼれる　夢　酔
背中合わせで両家互に裏と呼ぶ　弘　生

正論をぶって冷たい目を集め　虎　秋
黒枠へその約束も葬むられ　孤呂二
嬉しい悲鳴幹事の膳で間に合わせ　独　仙
こう言えとメモを渡した電話口　河　南
末席の正論合点をされただけ　軒太楼
結び目を無言で直す母がいる　秀　雄
正論を通せば世間が狭くなる　流　石
吸殻と一緒に約束反古にされ　多賀子
紐落とし結んだ帯が背で泳ぎ　正　子
正論も仲間の多い方になり　正　江
裏話聞いたら酒がまずくなる　芳　子
円高は明日を約束してくれず　孝太郎
一枚のメモ冷戦の幕揚げる　緑之助
結び目へ業を煮やした糸切歯　代仕男

どんぐり川柳会　谷垣史好報

辞書にない方言を駅で聞き　凡　子
大切な母の心は辞書にない　鎮　彦
巻き添えで化石にされることもある　酔々
辞書と首っ引きで嬉しい便り書く　一二三
親亀がこけて子亀も行詰り　瓢　太
太公望　辞書に載るとは知らなんだ　恵美子
廃坑の巻き添え炭坑節も消え　憲　祐
辞書引いてみよと言いたくなる手紙　吸　江
もう少し生きるつもりの辞書を買う　好　郎
巻添えの中に清和源氏のすえのすえ　小松園
巻きぞえの母が真実知っている　真　砂
政治家の辞書から悪の字が消える　鬼　遊
辞書見ても当字書いてる老眼鏡　勝　美
永平寺　辞書には寒いと書いてある　岳　人
巻添えのここにも眠る英霊碑　吐　来
シャッターを閉めて店舗の火の車　雅　風
巻きぞえで犬も一食抜かされる　史　好

京都塔の会　松川杜的報

終列車馬橇の鈴を消して着き　和　友
寒行の団扇太鼓が戻る寺　潮　花
日本猿四季を生き抜く知恵を持ち　芳　子
晩酌のおこぼれ程を妻も飲み　飛　鳥
風邪三日損したなあと天井みる　美　穂
掛声のタイミング毛槍が空を切る　杜　的
掛声が冷えた校舎にはねかえる　三　求
一二の三で今日は機嫌のいい日なり　水　客
奇術師の白紙一枚飯のたね　客遊子
無条件でまかされ余計気をつかい　誠　史
総会に少し足りない委任状　佳丹子
裏金が動いた白紙と記事の感　白渓子
白紙撤回男は後をふり向かず　萬　的
しろじろと梅に降る雨バスを待つ　笛　珠
かしわ手へ梅の香少し揺れる朝　求　芽
それからの話がいつも長い母　弘　三

オーエスケー川柳会　大坂形水報

今年こそ三日坊主を改める　洋　美
桃割れに臨時の枕役に立ち　登
枕元スタンド照らす愛の歌　光　夫
病院の枕に泣いたしみがある　一　念
盃を重ねて自分を出して来る　幸　坊
改まるどころか逆に喰い下がり　亜也子
返盃がコップで戻ってくる若さ　博　泉
柱のキズ改めて見る誕生日　みどり
祝盃を共白髪まで酌んだはず　雅　洋
盃を前にうらめし免許証　亜　成
ライバルの盃笑顔で受けて置く　栄
このへんで妥協する気で盃を伏せ　千　夢
一日の疲れ枕を選ばない　一　扇
国鉄が値下げしてこそ改まる　聖　地
年改まる首筋が寒くなる　度
新年の闘志盃に写ってる　秀　川
改まる今日からネクタイきつくする　野　生
おかっぱの頭枕に落ちつかぬ　形　水
枕元に電話灰皿週刊誌　入　仙
二DK北も南もない枕　好　郎

佳句地10選（前月号から）

町紅氏代選　**不二田一三夫選**

東京の今どまん中に立つ若さ　小松園
振り向いてしまうと終りが待っている　一　念
自画像の輪郭少し濃くなり　節　夫
表札の一字とられてツバメの巣　登
尺取虫石橋叩く人に似る　綾　女
予言者が大きなナマズ飼っている　雀踊子
新鮮な嘘ポケットに詰め帰り　ゆう也
不覚にも子の傷口にふれていた　君　子
あひるなど住めぬ千代田区一番地　酔々
プライドをつつくと指輪一つ売れ　度

川柳大阪　児島与呂志報

気丈夫な娘の就職が気にかかり　希久志
大阪の乞食は洋書を読んでいた　敏
忙中閑あり花の彩を賞め　洛酔
弱点をかくす化粧を濃くする　三十四
ごきげんが直った下着のアップリケ　比呂志
竿いっぱい妻L寸の下着干す　眉水
伝統にしばられ一隅のみ照らす　弘生
伝統が傾きかけている不況　天平
晴ればかりではない夫婦永い旅　真佐志
カラオケが流しの飯を食いつぶす　君枝
限界を皆知らん顔して伸び縮み　本蔭棒
宮仕え今日も引き金引かぬまま　重人
雨風に口一文字晴れを待つ　佳加志
伝統の重さは片手では持てぬ　笑風
美しい意地伝統にしがみつき　六竜子
もう父を異性として見る娘の下着　雅巣
弱点を鏡素直に反射する　秀峰
ワンマンの社長に学歴ない弱身　道子
弱点を隠くす男のでかい声　与呂志

南海電鉄川柳部（大阪市）辻圭水報

優先座席ここ判らんのかと矢のしるし　摩天郎
小さい子に優先席を指さされ　宏子
バスもただ優先座席へ手を合す　朝子
老人をいたわる様に示す席　千万子
優先座席我より齢上の人を見ず　小松園
白い目に優先座席のいたためず　柳信
ゆずられた席の温くみにある善意　勝美
優先座席狸寝入りでごまかされ　圭水
顔のきず優先座席わからない　東雲
善意の席備えたバスは市の誇り　与一
老人立たす優先座席が面憎い　誓二
粘り勝ちとうとう福祉の保護を受け　雅風
男子出産親より祖父母有頂天　綾女

川柳たけはら　森井菁居報

姓変る日の父母在りて友のいて　静水
それぞれに行くところがあり蝸牛　房子
嫁ぐ日近し父の酒量が増えてくる　千代子
十字路の真ん中にいて動けない　貞子
戦いの傷見せまいとする父で　文晴
四才の不思議桃太郎の桃が割れ　笑子
あたたかな冬が続くよ胎動よ　蘭幸
折られても痩せてもチョークの白きかな　不朽
陽のひかり二人で築く愛の城　鈍舟
ライバルの奮起がうれしい初春となり　寛子
白骨のように日本の松枯れる　改巳
人よしの娘さん若さ失わず　敬子
老梅の梢に蕾しかと付き　節夫
弱肉強食ピエロとしての職で老い　のばら
和解するきっかけがなく貝になる　英詩
いうまいぞ花も黙って咲いている　一路
ふりかかる火の粉夫婦として払う　酉合
たらぬ知恵補い合って明日へ生き　かつ子
制服を脱いだら酒徒になるもよし　菁居
春の陽から合唱聞こえそう　小六愛
バトミントン打つとき風さん吹かないで　小三紀

城北川柳会　川口弘生報

新顔の方が頼りになりそうだ　三十四
新顔の課長は即答避けたがり　ふみ
荒削りだが新顔の持つ魅力　右近
新顔のファイトに惰性から目覚め　道子
新顔のお国訛りが親しまれ　玉子
新顔でも腕は球界のエース級　炉斉
新顔の美人酒場でモテモテし　一休
六十の手習い川柳の新顔で　テルミ
新顔は新顔同志話し合い　秀村
バス旅行新顔同志ですぐ友に　ハルエ
五つ子も新顔そろえて幼稚園　きくみ
入学式新顔ばかりで友ふえる　ますえ
新顔の改札定期よく睨み　満津子
老人会新顔迎えて若返り　喜代子
新顔へ兄弟子思わず顔ゆるめ　千子
初声にこれが吾が児かじっと見る　喜洸
見えすいた嘘へ素直なあぶら汗　としよ
絆創膏油がはねた跡なのに　恵美子
亡き友の卒業の日の髪油　弘生

倉吉打吹川柳会　奥谷弘朗報

進学に内助の母の夜が更ける　御前
裏方は奈落の底で油汗　律子
東大出誇りとしないお人柄　夕路
男花妻の内助の上に咲き　寿朗
大船に乗り出す梶は妻がとり　とめ子
うるむ目に内助のヒビの手がいたし　日満
功成って妻の内助を胸で謝し　一保

笑われるピエロ厳しい芸に生き　雄々

花道でワッと湧かせる夕演技　いさみ

男の花道苦労の森が抜けられず　〆女

花道でつまずく所作も芸のうち　車楽

花道に雪を降らせて南部坂　石花菜

金星へ花道拍手鳴りやまず　吉郎

あり過ぎる特技が足にからみつく　独歩

変り身が特技とんとん出世する　陳者

特技なぞ無い履歴書を持ち歩き　観洋

再婚へ特技の無さが踏切らせ　花子

逃げ切った先で黒幕よく笑い　洋々

定年が俺の花道かも知れず　弘朗

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

錦飾る故郷に無言の友が待つ　五木

梅便りくれば一本さげていき　実

中流の生活の線がみな違い　岩光

貢物古代大和の昔より　勝一

もう一杯をやめきれず医師を呼び　義美

俺の句が活字になって切抜かれ　久仁於

外孫にいる男の子逞ましい　嵌

姑女　嫁は楽よと温水器　一竿

老の入り未だ半疑のまま若し　寿子

掌で気にした厄に矢張り遇い　畑中

雑然と骨董割れたのも混じり　紫浪

酔っぱらい歩行もやがて罰金か　掬治

物言わぬ面と話しがしたくなり　虹汀

親友の慰留に思い直してみ　回天子

川柳高知　川竹松風報

定年へ田を埋め立てる設計図　富美子

酔う程に次元の低くなる話　朱坊

闘病が試練の心取り戻し　竹青

別れても父の肩書き付いて来る　節子

つけの効くバーで男自慢する　三吉

金借りに来て豪勢な土産物　登

責めを負う心算返事は書かぬまま　海州

言い逃れしても良心に責られる　竹萌

倒産の責めは泪で洗えない　秋翠

北風が別離の場面盛り上げる　節

拾う恋捨てる恋あり喫茶店　麗子

引越へ未練の残る物を捨て　恭一

立札を尻目に捨ててふり向かず　晩耕

喫殻を捨てるに丁度水溜り　芽十

五十には五十の青春の詩があり　菊野

手のひらに確かな愛の胎動　泰章

嘘のない泪が頬をすべりおち　紅雨

人生の悲劇ピエロの役もする　桂緑

定年という人間の使い捨て　松風

川柳後楽（岡山市）井上柳五郎報

雑談で探ぐり合ってる腹の底　正道

痛いとこに触れ雑談が白けきり　佐加恵

雑談の相手が欲しい老い一人　廉

雑談に聞き捨てならぬ事を聞き　胡風

雑談になればめがねは胸にさし　照路

雑談のうちに縁談打診する　紫峰

茶柱も出ぬだし殻で留守居番　梁太

茶柱を噛んで吐き出す紅茶党　定平

茶柱と関係のない忙しい　九坂

茶柱が立っておばばの歯が笑う　武夫

茶柱を気にして朝の茶をすすり　哲郎

お茶湯の茶柱祖母が嬉しがり　元一

値切ること知らぬ律義へ負けてくれ　たけ志

祝物だから値切らず買っておき　葵丘

値切って買ったから布袋が笑わない　恒洋

へそくりへ値切った額も加えられ　柳五郎

医療費を値切ってみたい失業中　博友

母親の前では悪党も人の子に　ひろし

悪の道知りつつ歩む気の弱さ　昌吾

住職の説教悪をすな悪をすな　幽谷

悪役の個性主役をくっている　草風

悪かったので先生に覚えられ　秋月

東大阪川柳同好会　三十四報

あちこちに亡父偲ぶ種落ちている　綾女

日蝕の日の女房に髭がある　弘生

新婚の窓太陽にのぞかれる　川狂子

太陽よ馬鹿な男がひとり生き　恒明

太陽にすまぬ減反さす政治　喜風

ビジネスの鏡は別の顔をする　三十四

南国のコケシで陽気な顔を持つ　柳宏子

肌寄せたこけしに雪がふりやまず　育園

偲んだら悔ばかりなり母逝って　千代子

めぐりあう老妓と偲ぶ京の宿　慶三

落日をタイム待ちする白い月　あいき

どん底に太陽がある夢がある　柳信

すっきりと夕陽に映える和紙の里　益孝

紙一重の差でもやっぱり負けは負け　文秋

紙芝居親孝行の絵を持たぬ　鎮彦

マンネリの壁に白紙が貼ってある　度

五線紙に明日のリズムが踊ってる　湖風
白紙には戻せぬ男の自尊心　雀踊子
実印を押せば凶器に変る紙　孤舟

和歌山七面句会　中筋三幸報

カメラ飲むリズム狂った胃の調子　知也
骨肉の争いつきず痩田打つ　周穂
ステーキは海外旅行でたべた味　富子
声までも口調も親子瓜二つ　勇次
親鳥の羽袖の中のひなの声　章子
どなる声隣は何をする人ぞ　光治
此の浮世弱肉たりとも背を正す　わか
百度石肉身愛も届かずば　世津
ステーキのぶ厚い肉も月はじめ　葉津子
声かけて振り向いた顔違う顔　晃
お隣が一緒で高い肉を買い　宣子
泣き声を米研ぐ水に消しながら　フクヨ
禁煙はかけ声ばかり三日坊主　亜木子
笑い声絶えない窓の灯がきれい　隆恵
うしろめたい声べらべらとよくしゃべり　和美
綱引きの子供に声の力かす　其夕
病床の声日日に強くなり　秀雄
声聞いてやっと解った性別が　美智子
江川君それでもカメラ集めけり　宏
肉体に忘れる年を知らされる　晶子
人間の極限シャッター非情なり　三幸

川柳後楽（合同句会）　井上柳五郎報

出まかせのいいわけに眼が笑っている　正道
出まかせを聞き馴れていて気にかけず　秋月
出まかせに耳を貸してる暇な時　博友
出まかせの中に本当少しまぜ　ひろし
出まかせにのせてラッパを吹く男　恵美子
出まかせが平気で言えるお人柄　定平
合理化が軌道に乗らぬ間に倒れ　幽谷
合理化ひしひし倒産かも知れず　佐加恵
合理化へ父の淋しい日が続き　九坡
合理化に医者は冷めたい匙加減　梁太
合理化を中に労使はむきになり　久米雄
合理化は庭をせばめて葱を植え　胡風
合理化に睨みをきかしストが待ち　元一
罪一つ許して心に幅ができ　夏彦
マイペースの歩幅を変えぬ登り坂　哲郎
肩書の数で男の巾が出来　武夫
紋付が幅をきかせる床柱　廉

落っこちて跳べない巾と知った老い　柳五郎
巾広い父の背中があたたかい　孝柳
幅のきく地位に疑惑の風が鳴り　昌吾
粗品にも慾と義理とがつつき合い　たけ志
粗品からたらいまわしの跡見つけ　照路
粗品でも心の温みが滲んでる　恒洋
進学の孫へ粗品の値をふやし　宏大

駒つなぎ句会　里小路報

相続権放棄の実印押さされる　小松園
無理を云う母の命を祈るのみ　規不風
無理だとは云えぬ立場をわびしがり　宏子
寒がりをチョイチョイ呼びに来る用事　恒明
寒がりの目に水仙の皆笑う　はやを
ふる里はいいな姿勢も楽になり　桐下
春風を受ける姿勢は柔らかで　酔々
違反車が恐れ入ってる高姿勢　茂子
ひとまわり大きく見えた児の姿勢　柳伸
金づまりがさせた不動の姿勢です。　一二三
寒がりが一人混っていた会話　凡九郎
実印は祈るが如く押している　勝美
義理で押す実印だから朱がうすい　美代
紐付きの女と知らず世話をする　綾女
ノルマにはまだまだ靴紐しめ直し　潔
紐取りと小石を蹴ったわらべ唄　千代三
実印を女当主として握り　小路
前向きの姿勢は出来ず子を叱る　勉
これだけの女に惜しいや猫背　育園
答弁に立てば総理も低姿勢　善信

三井ヶ丘川柳会　高田博泉報

訊問へ非行少年無邪気すぎ　形水
万病に通ずる一病と生きる　弘生
期待した紅梅二輪咲いただけ　降子
満員へ働き蜂がじっと居る　武功
満員の谷間に黄色い帽子の子　よしひろ
夕映えに蕾揃うている辛夷　三郎
ほのぼのと老父を相手に酒を酌む　琴音
桜茶を飲めば雀が来てのぞく　野生
椅子一つ空いて昇進期待する　光夫
足の裏員がくすぐる汐干狩　てまり
友達が変って知った子の非行　寿馬
ゴムの木とコーヒー冬を逆光に　度
暖冬へ蛙のねむり浅くなる　亜也子
期待してついてきたけどコーヒだけ　亜成
満員に押し潰されてきた土産

満員へまだ逃げられぬ朝続く　博泉
満員車降りておたいこ見てもらい　小路
子供の瞳大人の非行直視する　柳宏子
物満ちて愛に餓えてる非行歴　静歩
満員の中の一人が私です　あいき
有る丈の彩で自分を塗ってみる　凡九郎
拡がっていく非行に物差しなどはない　亜鈍
満員車愉しいことが一つある　鬼遊
春風に逢うて古傷疼き出し　小松園
デパートで買う駅弁は曽遊の地　薫風

南大阪川柳会　中川滋雀報

さわやかに目覚めて一日よく動く　智子
締め切って二十の部屋にする目覚め　好一
少年の目覚め母校の名に恥じる　喜風
がり勉で春の目覚めをまだ知らず　あいき
振り出しに戻るファイトも忘れまい　好郎
ファイトかき立てるラッパに踊ろうか　滋雀
山彦が出るまで呼んでいるファイト　酔々
愛を追うネクタイにまであるファイト　雅風
太陽が昇ると洗たくしたくなる　千万子
人生をすねた背中の昇り竜　涼一
職のない身に高々と陽が昇り　一二三
鏡の中で老いを見つめてゆく怖さ　君子
そのへんで諦めたらと云う鏡　文秋
鏡よ鏡玉三郎は男だよ　恒明
退屈な午後で蠅まで動かない　柳宏子
退屈な時は私が病んでいる　久子
退屈をしる時思わず年思う　凡九郎
乳飲み子のくれる笑顔は神のもの　憲祐
本当の事をこどもの目がみつめ　雀踊子
夢を持つ子ども我まんを知っている　鎮彦

勝山双葉川柳会（大阪市）　河野君子報

暖冬のともあれ嬉し日向ぼこ　市郎
甘えを知らぬ女に意地が一つある　千里
折紙の角々を折り我を折る　田鶴子
ユーモアの通じぬ妻も笑い出し　緋沙子
食卓のいろどり落ちて老いを知る　利代
恋人と受験が同居する頭　茂
何んとかしてくれるだろうと云う甘え　文秋
造花らんまん庭の桜はまだ固い　あいき
弱虫で時々面が欲しくなり　夕花
よろめきが終れば夫甘えてき　久子
冴えている頭青春に悔いはなし　節子
母の絵の中で甘えてばかりいる　智子
甘えもう許せぬ掟の中にいる　君子

川柳塔まつえ　恒松叮紅報

校門を今日は選挙としてくぐる　登美也
夢抱いて出た校門の天高く　みのる
校門で誓った十年後の集い　愚童
一枚の写真と語る夜ふけまで　三和
はん捺すと紙一枚が重くなり　虎秋
一枚のメモが世界を騒がせる　祥月
年頃へ職場つれない労基法　叮紅
両親は口べたでしてとよく喋り　鶴丸
口べたは揃って同じ席をとり　孤呂二

★

▼ご通報くださるとき、もう一度、規定を読んでください。**原稿は原稿用紙に**——。

第三回　**全日本川柳大会**

日時　**昭和54年6月24日(日)正午より**

会場　**大阪市中央公会堂**
大阪市北区中之島一丁目一
（地下鉄淀屋橋駅東へ）

宿題　第一部　事前投句　締切五月末日
「**天**」藤島　茶六選
「**地**」岸本　吟一選
「**人**」山田　良行選
25cm×21cmの句箋に単記無記名
題記入、出句封筒に住所姓号明記

第二部　当日出句　締切一時
「**本**」橘高　薫風選
「**時事雑詠**」大森風来子選
「**みどり**」尾藤　三柳選
「**心**」去来川巨城選
各部各題共二句「未発表に限る」

表彰　川柳大賞。大会賞等

会費　一、〇〇〇円（発表誌呈）
宿題第一部は投句と同時送付
宿題第二部のみは当日会場受付

投句先　530大阪市北区中之島3—6—32
大ビル六〇八号　片山法律事務所内　全日本川柳大会係

懇親宴　大会終了（五時予定）後開催
会費三、〇〇〇円
5月30日までにお申込み下さい

主催　**日本川柳協会**

本社五月句会

日時　五月七日（月）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番
柳話　野村太茂津
（今月の出題・香川酔々）
兼題　「手ぶら」　玉置重人選
「太っ腹」　香川酔々選
「空論」　本多柳志選
「旅」　正本水客選
席題　二題　当日発表
会費　三百円　各題三句以内厳守
☆投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

6月の兼題　表紙の2ご参照

本社句会

6月7日（木）	6時から
7月6日（金）	〃
8月7日（火）	〃
9月7日（金）	〃
10月7日（日）	二賞発表句会

常任理事会

5月4日（金）	5時から
6月4日（月）	5時から
7月2日（月）	5時から

●募集●

七月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「織姫」西山幸選
「ソーメン」岡崎祥月選
「歯止め」傍島静馬選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかい。

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「氷」渡辺菩句選
「ハト派」大矢十郎選
「ルーツ」森下愛論選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

常任理事会は5月4日 5時から

定価　四百円（送料29円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十四年四月二十五日印刷
昭和五十四年五月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話　大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

カッケ（脚気）
肉体疲労時のビタミンB1補給に
アリナミンA®
☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠
タケダ

・ペンハンピ・

もう暑い

★ぼくには二カ月早く夏が来て二カ月遅く冬が来る。一年中春と秋と夏みたいな中で生きているような気がする。コタツもコートも不要という典型的な雑草タイプだ。両親はゼニのかからぬように生んでくれたらしいが、ゼニを儲けることは教えてくれなかった。

初心者ばかりの川柳会

★小出智子さんと河野君子さんが中心になって「勝山[illegible]

[illegible]んたちから川柳会をつくってほしいという要望に応えたものだが、いわゆる二軍的な会である。夕食をすませて一と走り、句会へ出席できるという初心者ばかりの気軽なつどいである。既成作家が介入すると初心者の句が抜けなくなる。これでは「双葉」の意味がなくなる。なんとかユニークな川柳句会として大きく伸びてほしい。本社句会でもこの人たちを待っている。

勝山寄席

★同じ生野区勝山に、一年ほど前から〝勝山寄席〟というアマばかりの集団がある。すでに新聞などで紹介されているのでご承知の方もおられるだろうが、この若い笑芸グループのホームグランドが〝乗願寺〟というお寺である。〝南大阪川柳会〟の発会記念句会が同寺で催されたのも、ぼくにとっては何か因縁めいてくるものがある。いま売り出しの小出智子さんや河野君子さんは、この乗願寺が川柳のふる里なのだ。話を戻すが、この〝勝山寄席〟から、ぼくを引っぱりにくるのだが、指導力もなければ芸界に顔も売れていないので、目下逃げ口上ばかりだが、川柳の初心者同様、みな純真で、熱心だから爽やかである。漫才・落語・浪曲・腹話術・奇術までプログラムにある。奇術を勉強している人に、同人の元関西奇術教室の村田瓢太さんの話をしたら、「村田校長に教えを受けました」という。やっ[illegible]っている。

これはプロの話

★上方若手漫才の勉強会である、〝笑の会〟のことをここで一度書いたことがある。上方漫才の有望の若手を五、六組、故秋田実先生が指導されていたが、さすがにみんな順調に伸びた。この〝笑の会〟へ若手の漫才さんがみな入りたがっているのだがなかなか入れてもらえない。そんな中に、中田ブラック・ホワイトというコンビがいて、なんとか秋田先生にお願いして仲間入りさせていただいたとたん、コンビ別れということで、ついに〝笑の会〟入りはならなかった。うちへも数回来てくれていたが、雑誌「漫才」は廃刊してしまうし、こっちも彼らのことは忘れかけていたところ、こんどNHKの新人賞（新コンビ）をとってくれた。写真を添えて礼状が来た。

★川柳でいうなら〝川柳塔賞〟を獲得したわけだが、つぎは〝路郎賞〟である漫才大賞など、大きいのが二つばかりある。だがこれから十年、二十年と励げまねばならない。東への道は遠い」。

★故秋田先生は、われわれにハッパをかけられるとき「汗をかいてほしい。

★大相撲の解説者玉の海さんは、「苦しんでほしい。

★二子山親方は、「からだを苛めよ。と、三者三様、みな蘊蓄のある名言だとおもう。

大型新人

★角界の朝汐（元長岡）と球界の江川（法大）はとにかく近来まれにみる大型新人だろう。ただし江川はまだマウンドを踏んでいないのでなんともいえないが、朝汐はもう試験ずみだ。

★常陸山谷右衛門（19代横綱・出羽ノ海）の弟子の大錦卯一郎（26代横綱）のそのまた弟子に山錦という幕内力士（たしか小結になった）がいた。関大出身で学生相撲第一号だと記憶している。

★学生出身には雑草のような根性がないのはやむ得ないが、下積み時代の苦労も基本の一つであろう。

★川柳も根性のある新人はたのしみだ。

（不二田一三夫）

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十四年四月二十五日印刷
昭和五十四年五月一日発行（毎月一日発行）
川柳塔
五月号
定価 四百円（送料・二十九円）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスキャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージマ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪各店）
京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL (641) 0551

雑誌 05703－5